福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1352集

比恵 84

－ 比恵遺跡群第145次調査の報告 －

2018

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くから中国大陸や朝鮮半島など東アジアとの文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに、市内には数多くの遺跡が残されており、本市におきましては保護と活用に努めているところであります。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財については、事前に発掘調査を行って、記録保存を行っています。

本書は、博多区博多駅南四丁目地内における店舗増築工事に先立ち実施した、比恵遺跡群第145次発掘調査について報告するものです。この調査では、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代の集落跡を検出し、土器や鉄器、ガラス玉などが出土しました。集落跡は、竪穴住居や掘立柱建物が何度も建て替えられ、特に弥生時代中期から古墳時代前期には、集落が非常に栄えていたことが分かりました。また弥生時代終末期の竪穴住居からは、玉作り用の砥石や多数のガラス小玉が出土し、比恵遺跡群が当時の玉類の生産と流通の拠点であることを示唆する重要な発見となりました。これらの調査成果は、この遺跡が地域の歴史において重要なものであることを示す貴重な資料となっています。

本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究資料として、また地域の歴史の学習の材料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業者様をはじめとする関係者の方々には、発掘調査から資料整理、報告書作成にいたるまで、ご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げる次第であります。

平成30年3月26日

福岡市教育委員会
教育長　星子 明夫

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が、平成28年8月1日から同年9月30日まで発掘調査を実施した、店舗増築建設工事に伴う、比恵遺跡群145次調査の報告書である。

2．発掘調査は、増築建設工事によって遺構が影響を受ける範囲について行っている。

3．遺構の呼称は記号化し、溝状遺構をＳＤ、竪穴建物（竪穴住居）をＳＣ、掘立柱建物をＳＢ、土坑をＳＫ、柱穴などピット状遺構をＳＰ、その他の遺構（大型柱穴，遺構集中部，不明遺構，特殊遺構）をＳＸとした。

4．本書の遺構図に用いる方位北は、ほとんどが国土座標北（G.N.）である。磁北（M.N.）は真北から西偏約6°20′である（国土座標北からは西偏約6°40′）。ただし図面によっては真北を求めている。調査地付近の国土座標点（世界測地系）は、国土交通省が各所に設置している都市再生街区基準点から座標位置を求め、さらに日本測地系に変換している。また調査区内の標高は、道路下水道局が市内小学校に設置している水準点のレベルを利用し、春住小学校の水準点（6.483m）から移動して用いた。なお、このレベルは世界測地系基準点（上記）から移動したものより3.8㎝低く、埋蔵文化財設置の日本測地系基準点のレベルより2.8㎝低いことが判明したので、今後注意する必要がある。また同一敷地で調査範囲が重複する比恵50次調査図との合成は、調査原図に基づき、敷地地境と調査範囲の関係と、重複する複数の同一遺構により行った。

5．本書に用いる遺構図の作成は、調査担当の久住猛雄（経済観光文化局埋蔵文化財課）および、荒牧宏行（埋蔵文化財課）、藤野雅喜、坂口剛毅（埋蔵文化財課技能員）、波多江彩香（福岡大学大学院）、松岡奏（奈良大学学生）が行った。遺物の実測は、土器類は主に平田春美、山本麻里子、光吉千里（埋蔵文化財課技能員）が行い、一部を田中健（駒澤大学学生）、中野真澄（九州大学学生）、久住が行った。また久住が各図をチェックし一部修正した。石器の実測は、山口譲治（文化財保護課嘱託）が行い、一部を立石真二（埋蔵文化財課技能員）が行った。鉄器の実測は、立石、久住が行った。製図は、主に久住が行い、山本、光吉、立石のほか、小畑貴子、松下伊都子、鳥井幸代（整理補助員）が行った。玉砥石および玉類の実測は谷澤亜里（九州大学教員）が行った。また本書に用いる遺構・遺物写真は、玉類のみを谷澤が撮影したが、他は全て久住が撮影した。

6．鉄器の錆び取りおよび保存処理は比佐陽一郎、松園奈穂（埋蔵文化財センター）が行った。またガラス玉の蛍光X線分析による成分分析は、埋蔵文化財センターの機器を用いて谷澤と松園が行った。

7．本書の執筆と編集は、玉砥石と玉類に関する記述を谷澤と松園が、石器を山口が行ったが、他は久住が行った

8．本調査に関わる出土遺物と記録類（図面・写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵され、管理される予定である。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
Ⅱ．調査の記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　1．調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　2．検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　3．出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
Ⅲ．調査のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
図版（ＰＬ.）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37

1．SC005 東側屋内土坑玉砥石・焼土塊出土状況（西から）

2．SC005 東側屋内土坑・中央土坑（南から）

3．SC005 東側屋内玉砥石・焼土塊出土状況（東から）

4．SC005 中央ガラス小玉・碧玉管玉出土状況（東から）

5．SC005 および上部ピット群（北から）

巻頭図版２

１．比恵 145 次調査区全景（南西から）

２．比恵 145 次調査区全景（北東から）

１．　SD022・SC020 掘削状況（西から）

３．SD022-023 土層断面・遺構掘削状況（北西から）

２．西側調査区 SC005, SC020 周囲掘削状況（南西から）

４．東側調査区調査状況（北東から）

５．東側調査区西部島状部遺構検出状況（北東から）

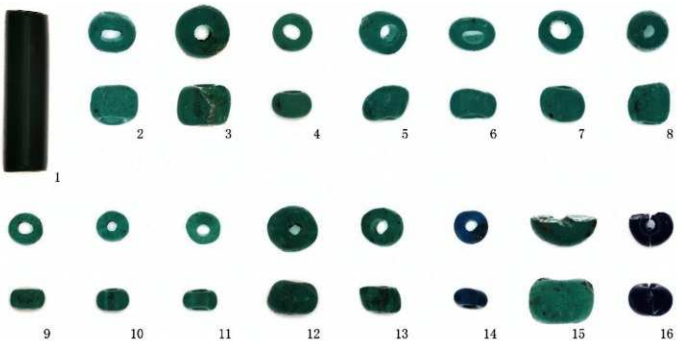
６．東側調査区西部 SC031 東側土層断面（北東から）

巻頭図版４

２．SX（SE？）135 掘削状況（北から）

３．東側調査区 SX003（SC012 ほか）調査状況（北から）

１．SD001（50 次 SD055）断面確認状況（北から）



４．SC005 出土管玉・ガラス小玉写真

５．SC005 屋内土坑出土玉砥石写真

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区博多駅南四丁目 49 番 1，49 番 2 地内における店舗ビル増築工事の開発事前協議申請に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 28 年 7 月 7 日付で受理した（事前審査番号 28-2-288）。これを受け経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課事前審査係は、照会地が周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群（分布地図番号 37-0127）に含まれ、かつ同一敷地の既存店舗建設工事に先立ってすでに発掘調査（比恵遺跡群第 50 次調査、福岡市埋蔵文化財調査報告書第 451 集）が行われ濃密な遺構が検出されており、今回の増築工事対象地においても埋蔵文化財の存在が明白であること、また予定される工事は地下の埋蔵文化財に影響を与えるものであり、記録保存のための発掘調査が必要であると判断した。この判断のもと事業者との協議が行われ、埋蔵文化財への工事の影響が避けられない範囲について記録保存のための発掘調査を実施することで事業者と合意した。その結果、平成 28 年 7 月 29 日付で事業者である株式会社宜翔物産を委託者とし、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財発掘調査業務に関する委託契約を締結し、同年 8 月 1 日から 9 月 30 日の期間で発掘調査を実施することになった。

発掘調査は平成 28 年 8 月 1 日に開始し、同年 9 月 30 日に終了した。なお資料整理および報告書作成は平成 29 年度に行い、平成 30 年 3 月に報告書を刊行することになった。

また、当該調査に関する基本情報は本頁下表のとおりである。

2．調査の組織

調査主体：　福岡市教育委員会

（発掘調査　平成 28 年度：資料整理・報告書作成　平成 29 年度）

発掘調査および整理・報告総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課　課長　常松幹雄
埋蔵文化財課調査第２係長　加藤隆也（平成 28 年度）
埋蔵文化財課調査第２係長　大塚紀宜（平成 29 年度）

事前審査：埋蔵文化財課事前審査係　主任文化財主事　池田祐司
文化財主事　清金良太

発掘調査および整理・報告庶務：埋蔵文化財課管理係　横田　忍（平成 28 年度）
文化財保護課管理調整係　松原加奈枝（平成 29 年度）

発掘調査および整理・報告担当：埋蔵文化財課調査第２係　文化財主事　久住猛雄

＜調査基本情報＞

遺跡名	比恵遺跡群	調査次数	145次	調査略号	HIE-145
調査番号	1617	分布地図図幅名	037 東光寺	遺跡登録番号	020127
申請地面積	7,589.50㎡	調査対象面積	468.00㎡	調査面積	422.91㎡
調査期間	平成28(2016)年8月1日～9月30日			事前審査番号	28-2-288
調査地地番	福岡市博多区博多駅南四丁目49番１，49番2				

3．周辺の地理的歴史的環境

比恵遺跡群は福岡平野中央の那珂川と御笠川・諸岡川に挟まれた洪積台地（段丘）上に立地し、145 次調査地点は遺跡群中央部に位置する。周囲の現況標高は 6.9～7.1m である。今回の 145 次調査地点

は、以前に実施された比恵50次調査D区の南側に接し、一部重複している。

さて比恵遺跡群の位置する地区は、現在は標高5～8m前後の比較的平坦な市街地を形成しているが、これは戦前に行われた博多駅南地区の大規模な区画整理事業や、近年の都市開発の結果である。本来は小規模な開析谷複雑に入り込んだ八ツ手状の景観であり、若干の起伏がある段丘地形であった。遺跡群の立地する段丘は、花崗岩の風化礫層を基盤とし、その上部に粗砂、細砂、黒褐色～暗褐色シルト（腐植土状）、阿蘇山の約9万年前の大噴火（Aso4）による火砕流起源の青灰色砂質シルト層・八女粘土・鳥栖ロームが堆積し、その上に動植物や人間活動痕跡をふくむ表土層が形成される。比恵遺跡群では多くの場合、表土層を除去した鳥栖ローム上面、または削平が顕著な場合には八女粘土上面で遺構が検出される。ただし、微地形上の鞍部（谷部）では二次的に堆積した黒褐色シルト質土層上面で遺構が検出される場合や、遺構密度が濃密過ぎて「真っ黒な包含層」状になっている場合もあり注意を要する。これは比恵遺跡群に南に接して連続的に広がる那珂遺跡群や、同様に東に接して連続的に広がる山王遺跡でも同様である。比恵と那珂、あるいは比恵と山王の遺跡間には、浅い谷部ないし鞍部が形成されているが、これは中世以降の新田開発により自然の開析を拡張ないし段丘中央に深く入る形で新たに開析した部分が多くあると考えられ、これら3遺跡は本来的に連続的な同一の段丘に立地し、また遺構分布の連続性や遺跡展開過程からみても相同的であり、実質的に同一の遺跡群（「比恵・那珂遺跡群」）として把握できる（田崎博之1998、久住猛雄2008・2009、森本幹彦ほか2015）。

比恵遺跡群では、縄文時代晩期末ないし弥生時代早期（「突帯文土器」期）以降、飛鳥・奈良時代に至る時期の集落および墳墓遺構が主に調査されている。比恵・那珂遺跡群（山王遺跡含む）として見た場合、その範囲は南北2.4km×東西0.5～1.0kmという広大な面積となる。特に、弥生時代中期後半（須玖Ⅱ式）から古墳時代前期前半（紀元前1世紀～紀元後4世紀初頃）、飛鳥時代前半～中頃（6世紀末～7世紀第3四半期頃）に遺構分布と遺構密度のピークがあるが、これらの時期の遺構分布範囲は100haを超える。このうち前者の弥生時代から古墳時代前期の遺跡としては、日本列島内で最大級の規模であり、それだけでも重要性が理解される。比恵遺跡群の初源は旧石器時代の遺物に遡り、縄文時代は前期の遺物が出土している。弥生時代早期以降の遺物・遺構は継続的にあり、弥生時代前期初頭（板付Ⅰ式）以降は遺構・遺物ともに増加する。弥生時代前期は、遺跡の北西部を中心とした段丘縁辺部数箇所に貯蔵穴や水溜土坑（溜井）、溝（小水路）などの遺構の分布がみられる。同じ頃、那珂遺跡群南端には早期後半成立の二重環濠集落が存在する。前期後半以降に竪穴住居、貯蔵穴、土坑墓・甕棺墓地などの遺構の分布が各所に広がるが、中期前半（須玖Ⅰ式）以降に段丘中央部の標高「高位面」（田崎2008）に甕棺墓地や竪穴住居、土坑などの遺構が進出するのが画期である。中期後半（須玖Ⅱ式）以降には段丘中央部を中心に遺構分布が濃密となり、「集住」して広大な集落を形成する。段丘中央への居住域進出とともに中期中頃（須玖Ⅰ式後半）には八女粘土層まで達する井戸の掘削が開始されるが、近年の調査では山王遺跡の段丘上において中期前葉（須玖Ⅰ式前半）から井戸の掘削があったことが明らかになった（山王10次、福岡市埋蔵文化財調査報告書第1309集）。段丘中央の居住遺構が濃密化する中期後半には、八女粘土層以下までも深く掘削する井戸も出現し、井戸の造営数は北部九州の同時期の遺跡では突出して最大多数であり、その状況は古墳前期前半まで継続する（久住・久住2008）。人口集中の結果であろう。中期後半以降は、高床倉庫や平地建物を含む掘立柱建物も多くなり、比恵遺跡群の中心部、段丘中央には径10m以上の超大型竪穴住居も出現する。さらに中期中頃から掘削が開始されるが、後期にかけて、直線的な大溝（条溝）や方形を指向する「環溝」が段丘上を区画し、通常の集落の構造とは一線を画する。弥生中期の墓地は複数箇所で確認できるが、比恵6次の墓群は墳丘墓を形成し（吉留秀敏1989）、中期前半の甕棺からは細形銅剣が出土した。後期になる

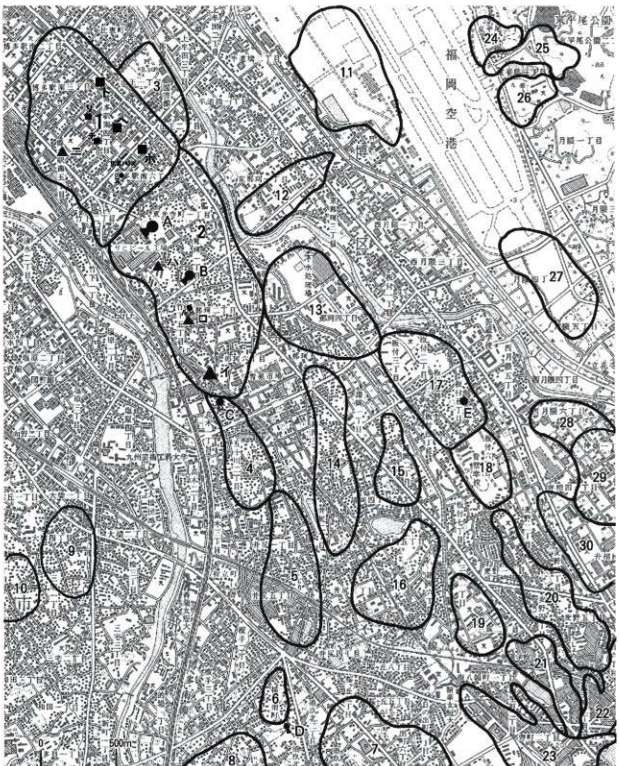


Fig. 1　比恵・那珂遺跡群と周辺の遺跡（1／25,000）

1．比恵遺跡群、2．那珂遺跡群、3．山王遺跡、4．五十川遺跡、5．井尻B遺跡、6．寺島遺跡、7．須玖岡本遺跡群、8．日佐遺跡、9．大橋E遺跡、10．三宅A遺跡・三宅廃寺、11．雀居遺跡、12．東那珂遺跡、13．那珂君休（那珂深ヲサ、那珂久平）遺跡、14．諸岡A遺跡、15．諸岡B遺跡、16．筑紫遺跡、17．板付遺跡、18．高畑遺跡、19．三筑遺跡、20．麦野A遺跡、21．麦野B遺跡、22．麦野C遺跡、23．南八幡遺跡、24．久保園遺跡、25．席田大谷（・赤穂ノ浦）遺跡、26．宝満尾遺跡（24～26．席田遺跡群）、27．下月隈C遺跡、28．井相田D遺跡、29．仲島遺跡、30．井相田C遺跡、A．東光寺剣塚古墳（古墳後期中頃、TK10＝6世紀中頃）、B．那珂八幡古墳（古墳早期～前期初頭）、C．今宮神社古墳（古墳前期？）、D．須玖御陵古墳（古墳前期初頭）、E．板付八幡古墳（古墳後期後半、MT85～TK43＝6世紀後半）、イ．那珂37・117次ほか（弥生時代早期環濠、飛鳥時代中～後期＝7世紀中頃～第3四半期長含建物方形区画）、ロ．那珂23・114次（飛鳥初頭～中期方形区画溝＝初期官衙遺構、初期瓦）、ハ．那珂115次（古墳後期末～飛鳥建物群＝初期官衙遺構、初期瓦建物）、ニ．比恵8・72次（「那津官家」比定地、古墳後期後半～飛鳥中期大型倉庫群・三本柱柵列区画）、ホ．比恵1～3号「環濠」群、ヘ．比恵2・6・16次ほか（弥生中期墳丘墓・古墳早期末～前期初頭比恵1号墳・県史跡「環濠住居址」）、ト．比恵131次（弥生中期末～後期の長大な井堰群）、チ．比恵143次（古墳前期初頭石硯出土地点）、リ．比恵91次（弥生終末～古墳初頭土器溜、「市」関連遺構か）、ヌ．比恵36・55次（古墳早期前方後方墳）、ル．那珂114次1号墳（古墳前期初頭前方後方墳）

※上図における遺跡（埋蔵文化財包蔵地）範囲はおよその範囲を示したものであり、全ての「周知の埋蔵文化財包蔵地」を網羅しておらず、事前審査窓口の分布地図ともやや異なるものがある。また調査の視展により遺跡範囲は変動する場合もあり、注意されたい。

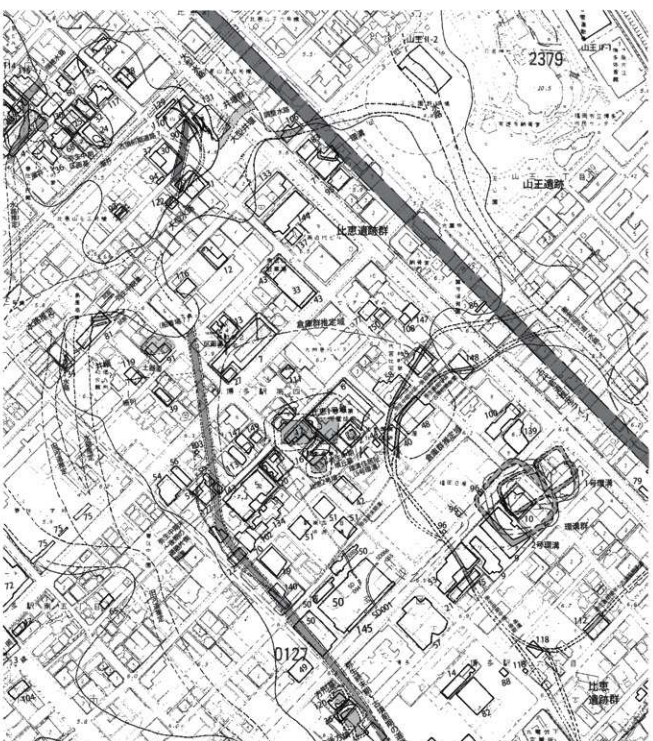


Fig.2　比恵遺跡群主要部と145次調査地点の位置(1/4,000)※1～3号環濠位置は修正

と墓地遺構は不明確となるが、井戸、竪穴住居、掘立柱建物、溝などの遺構は間断なく営まれる。後期初頭以降の井戸数の増加を考慮するとむしろ集落の人口密度は増大したと考えられる。比恵・那珂

遺跡群における井戸址の集中は特異であり、水場に乏しい段丘上における極度の「集住」がその築造の背景にあろう。後期初頭以降には比恵中央東部に「1号環溝」が造営され（綿山猛1958）、以後、「3号環溝」「2号環溝」と続く（久住 2008）。片側ないし両側に側溝を備える「道路」的な帯状空間が少なくとも中期末には出現しており、条溝、環溝とともに広大な集落内を機能的なネットワークとして区画することが開始され、以後「街区」化して「都市」的様相を呈していく。弥生時代の比恵・那珂・山王は、銅鏡副葬等の厚葬墓や青銅器埋納遺構が現状見られず、それらが存在する福岡平野のもう一つの弥生時代巨大遺跡群である須玖岡本遺跡群（春日市）と比較して、政治・祭祀のセンター性に乏しい。しかし、高床倉庫域と考えられる広域の掘立柱建物卓越地区の存在（比恵 7・27・6・58・35・48・113・147 次など）や、朝鮮半島系（粘土帯土器、三韓土器、楽浪土器）や列島内各地の広範囲の外来系搬入土器の継続的存在などから、交易（経済）の一大拠点としての性格が考えられる。長距離交易の一大拠点であったことは、水銀朱原料である辰砂（中国大陸原産）の多量出土（57 次、他に 69 次も出土）や、中国戦国末期の「燕」ないし衛満朝鮮に由来する鋳造鉄斧の出土（51 次）、細長方形板状小型鉄素材の出土（57・70・123・125・145 次ほか、57 次鉄素材は中国大陸の「抄鋼」とされる）、中国南方～東南アジアに生産地が考えられるガラス（カリガラス）小玉（6・145 次、山王 11 次ほか）の多数出土やインド産とされる特異な赤褐色ガラス（ムチサラ）極細管玉（山王 10 次）の居住域での出土、基準重量での取引の存在を示す棹秤用の「石錘」の出土（125 次）、北陸産小型管玉の出土（145 次）などからもうかがえる。長距離交易関係遺物では、今のところ中国銭貨（五銖銭、貨泉ほか）のみの出土がないが、福岡平野における比恵・那珂の衛星的集落（雀居、久保園、下月隈C、仲島遺跡）で出土がみられることから、いずれ出土する可能性が高い。これに関連して、比恵遺跡群中央から北半部では、弥生時代から古墳時代前期にかけて、石錘・土錘、軽石製浮子、鉄製ヤス（銛）・アワビオコシ・釣針などが出土し、海上を含む漁撈関係遺物が意外と多く、海上交易活動と漁撈を営む集団も居住していた可能性が高い。弥生時代では、鉄器は弥生時代中期末までにかなり普及していた証拠があり、出土する中期後半以降の木製鍬は、80%前後が鉄製刃先装着用とされ、農具というより段丘上での掘削に使用する「土木具」が大半であった。そのほか青銅製鏃先が一遺跡で最多数出土しているなど、特異な状況である。さらに比恵・那珂では青銅器・ガラス製品生産関係遺物も複数地点で出土する。須玖岡本遺跡群のような極度の集中性はないが、鋳型出土数では須玖岡本遺跡群に次いでいる。

弥生時代終末期（近畿地方の庄内式併行期）になると、比恵・那珂は再編成期を迎える。まず、集落再編の軸として、先行する複数の「道路」状空間を直線的に結ぶように、比恵遺跡群中央北西部から那珂遺跡群中央部まで貫く延長 1.5km 以上の両側側溝を備えた「道路」が造営され、それと同じ方位で一辺 70m と大型化する「2号環溝」が掘削される（久住 1999・2008）。後者は「王」の居館と推測され、その成立直後の古墳時代早期（弥生終末期後半）には、九州最古の前方後円墳である那珂八幡古墳が那珂遺跡群中央に築造される。当初の「道路」の終点は那珂八幡古墳付近とみられるが、その後古墳時代初頭にさらに南側に延伸され、その両側に前方後方形を含む古墳前期の小古墳群が次々と造営されている。その最南端は、那珂遺跡群に南接する五十川遺跡北部の今宮神社古墳（かつての航空写真と地形図から 50m長以上の前方後円墳と推定）の近くまで延びることがほぼ確実である。「道路」の北側はこれまで不明確であったが、近年の調査（比恵 127・132・143 次）から比恵中央段丘北西部で緩やかに北に曲がることが判明し、試掘調査の諸成果と合わせ、比恵北部を横断する「水路」が湾入すると推定される箇所に向かって延びると推定される。この湾入部分は、今後「船着場」遺構の検出可能性が注意される。さらに比恵南西部でも西から谷部が湾入した場所上に「道路」推定線が来るが（比恵 141 次南）、この谷部では今後「橋」が検出される可能性もあり、あるいは「船着場」が存在す

る可能性もある。比恵・那珂における長大な「道路」の造営途中、那珂八幡古墳造営頃に、奴国の「主都」須玖岡本遺跡群は衰退し、青銅器工房群が途絶え、遺構も激減する。比恵・那珂に奴国の「主都」が遷ったと考えられる。比恵・那珂には那珂八幡古墳だけでなく、弥生終末期古相に推定一辺 20m前後の方形墓があり（比恵 120 次：東が「道路」で画され、L字溝は方形周溝の一部、石棺痕跡を中央とし推定）、これに接し「道路」沿いに並ぶ終末期新相の推定全長 36m の前方後方形周溝墓があり（比恵 36・55 次）、さらに比恵中央部には弥生中期墳丘墓に接して、終末期新相成立の一辺 30m以上の比恵1号墳がある（6・17・89 次）。比恵1号墳とそれに接する比恵2号墳（古墳初頭）の周溝には（16 次）、西日本各地と朝鮮半島系土器（楽浪、馬韓）があり、交易を司る被葬者が考えられる。この周囲は漁撈具が多い地区であり海上活動の指導者でもあろう。比恵・那珂の居住域は、「道路」（メインストリート）や「2号環溝」の造営により諸施設の方位が同じ方向を指向し、また墳墓域の再設定により居住域に変動があるなど「区画整理」が進むが、古墳時代前期前半までは集落規模と遺構分布は維持される。

ところが古墳時代前期後半には遺構が激減し、その後古墳中期初頭から中期末までの遺構の分布は非常に疎らでごく僅かとなる。しかし中期末（5 世紀末頃）前後には那珂遺跡群に剣塚北古墳が造営され、これを契機に比恵・那珂集落の拠点化が再開される。後期前半～中頃（TK10 期：6 世紀第2四半期）には那珂北西部に三重周溝を巡らす全長 75m の東光寺剣塚古墳が築造される。この剣塚は三重の周溝と周堤内に「造出（別区）」を有し、さらに石室に肥後系の石屋形を有するなど非常に特異な古墳である。三重周溝を含めると 100m以上の規模となりこの時期では九州最大級である。「官家」を管掌する在地首長として中央に厚遇され、かつ力を誇示したものか。この剣塚の築造位置は、かつての「道路」の「交差点」＝「衢」の場所であることが注意される（那珂 99 次）。「道路」を通じて那珂八幡と直結し、「始祖」王墓との関係性を交通の要所で明示したのだろう。同じ頃に（TK10～MT85 期）、比恵北西部で三重柵列に囲まれた大型倉庫と高殿的建物を有する方形区画が成立する（比恵 109・125 次）。さらにその直後（6 世紀第3四半期～7 世紀中頃）：MT85 期造営？～Ⅳ期末頃？）にはそれに接して、約2倍の空間をやはり三重柵列で囲む大型倉庫群（比恵 8・72 次）が成立して建替ながら 100 年近く維持される。これらの三重柵列区画＋大型倉庫群は、『日本書紀』の「那津官家」（536 年？成立か）に関連すると考えられ（柳沢一男 1984、米倉秀紀 2003、桃崎祐輔 2012 など）、8・72 次地点は国史跡となった。剣塚古墳と「官家」の成立頃からは遺構が増大し、6 世紀第4四半期～7 世紀初頭（TK43＝ⅢB 期～TK209 古相＝Ⅳ期初頭）には、比恵・那珂・山王全体に竪穴住居、掘立柱建物、井戸、溝、道路遺構（比恵 113 次）などの遺構が多く展開し、再び「都市」的様相を呈する。この時期の竪穴住居には、一辺2m前後ながらカマドも有する超小型住居も存在することが特筆され（那珂 62・125 次）、単身者の移住も推定される。また鍛冶関連遺物が比恵 113 次で集中しており、この地点には道路遺構があり、牛馬歩行痕跡がみられ、重量物の行き来があったと推定される（桃崎祐輔 2012）。井戸も再び多くなり、この時期には井戸枠痕跡が多くみられ、複雑な井戸枠構造が推定されるものもある（那珂 156 次：福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1312 集）。三重柵列＋大型倉庫群は比恵 39 次にもあり（ⅢB 期）、他にも7世紀前半にかけて大型掘立柱建物（山王 10 次、那珂 68 次）、倉庫群（比恵 50 次、那珂 18・23 次など）といった「那津官家」関連の倉庫群が存在する（菅波正人 1994b・2012 ほか）。さらに6世紀最末期以降7世紀第3四半期（Ⅳ～Ⅴ期＝TK209～飛鳥Ⅲ期頃）には、複数型式の「初期瓦」の出土が那珂でみられ（菅波 1994a、比嘉えりか 2008）、それを葺いた建物（那珂 115 次：福岡市埋蔵文化財調査報告書第 983 集）ないしその存在が推定される方形区画溝（那珂 23・114 次）も存在する（長直信 2016）。後者の区画溝は、かつての「道路」に沿っており、陸橋は東の「道路」側にある。初期瓦は西側溝に集

中し（23 次）、西側に瓦葺主殿が推定される（長直信 2016）。6 世紀末～7 世紀前半には、「道路」がインフラとして断続的に再利用されている。このような特殊な遺構群は初期官衙とみられるが、格が他と異なり、『日本書紀』の（前期）「筑紫大宰」（推古～斉明朝まで）に関連し（長洋一 1994、白井克也 1998）、外交・饗応機関であった可能性もある（長直信 2016）。これらの初期官衙群は、7 世紀第 3 四半期頃にしだいに正方位に移行する（比恵 7・13 次、那珂 37・117・56 次の「長舎建物」方形区画、那珂 8・69 次、那珂 63・62・114・75 次の南北条溝、那珂 115 次建物群など）。那珂南端の正方位長舎建物区画（Ⅳ期新相～Ⅴ期＝7 世紀中頃～3 四半期）は、時期的に斉明・天智朝の行宮である「磐瀬（長津）宮」である可能性を秘めている（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1034 集）。その後、125・132 次、那珂八幡周溝上層・那珂 13 次に「白鳳期」の百済系単弁瓦やそれらに伴う瓦（那珂 10・14 次）があり、引き続き初期官衙の一部に葺かれた可能性があるが、初期寺院が存在した可能性もある（那珂 115 次南方、125 次西方か）。さらに飛鳥時代後期～奈良時代までの古代瓦も散見され、井戸枠のある井戸も継続しており、奈良時代～平安時代初頭にも古代官衙の存在が那珂に想定され、比恵にも道路遺構（63・87 次）や正方位溝があり、竪穴住居が減少して居住域は不明確となるが、関連施設群が想定される。また「水城東門ルート」の古代官道（山陽道）が比恵・那珂の東端に造営された（那珂 102 次、比恵 79・86 次）。

周囲では、那珂の南方 1km 弱の井尻Ｂ遺跡群には飛鳥時代末から奈良時代初頭には正方位を示す官衙建物群と区画溝、道路遺構があり、その南側には多数の古代瓦を出土する整地域があり、「井尻廃寺」とされている。井尻Ｂは弥生時代中期から古墳時代前期の集落遺構も多く分布し、青銅器生産関係遺物も多い拠点集落である。弥生後期後半には 20ha もの集落域がある。井尻Ｂからさらに南に行けば、弥生時代の巨大集落であり「奴国」の中心（主都）である須玖岡本遺跡群（春日市）に到達する。那珂遺跡群の南東には、弥生時代前期末の朝鮮系無文土器（円形粘土帯土器）を多く出土した諸岡Ｂ遺跡がある。諸岡Ｂの東側には、弥生時代早期に遡る水田や弥生前期初頭掘削の環濠集落が知られる板付遺跡があり国史跡となっている。その他、比恵の北東の御笠川対岸にある東比恵３丁目遺跡、那珂東方の那珂君休遺跡や東那珂遺跡には、弥生～古墳時代の比恵・那珂を支えた水田跡が広がっている。

＜文献＞

久住猛雄 1999「弥生時代終末期「道路」の成立－比恵・那珂遺跡群における並列する二条の溝の性格と意義－」『九州考古学』74、九州考古学会

久住猛雄 2000「奴国の遺蹟－須玖・岡本遺跡群と比恵・那珂遺跡群－」『考古學から見た弁・辰韓と倭』九州・嶺南考古学会第四回合同大会

久住猛雄 2008「福岡平野　比恵・那珂遺跡群―列島における最古の「都市」―」『弥生時代の考古学』8、「集落からよむ弥生社会」、同成社

久住愛子・久住猛雄 2008「九州Ⅰ―福岡県下における弥生時代から古墳時代前期の井戸について―」『井戸再考』第 57 回埋蔵文化財研究集会

白井克也 1998「博多出土の高句麗土器と 7 世紀の北部九州」『考古学雑誌』83-4、日本考古学会

菅波正人 1994a「那珂遺跡群出土の古瓦について」『那珂 10』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 365 集

菅波正人 1994b「那津の口の大型建物について－福岡市比恵・那珂遺跡群の 6 世紀～7 世紀の様相－」『博多研究会誌』4、博多研究会

菅波正人 2012「博多湾岸のミヤケ関連遺跡」『日本考古学協会 2012 年度福岡大会研究発表資料集』日本考古学協会 2012 年度福岡大会実行委員会

田崎博之 1998「福岡地方における弥生時代の土地環境の利用と開発」『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会

長 直信 2016「九州における長舎の出現と展開－7 世紀代を中心に－」『長舎と官衙の建物配置』報告編、奈良文化財研究所研究報告第 14 冊

長 洋一 1994「新城「大宰府」の成立」『日本の古代国家と城』新人物往来社

比嘉えりか 2008「初期瓦研究の現状と課題」『七隈史学』9、七隈史学会

桃崎祐輔 2012「九州の屯倉研究序説」『日本考古学協会 2012 年度福岡大会研究発表資料集』日本考古学協会 2012 年度福岡大会実行委員会

森本幹彦ほか 2015『新・奴国展』福岡市博物館特別展示図録

榊沢一男 1984「福岡市比恵遺跡群の官衙的建物群」『日本歴史』465、日本歴史学会

吉留秀敏 1989「比恵遺跡群の弥生時代墳丘墓―北部九州における弥生時代区画簿の一例―」『九州考古学』63、九州考古学会

米倉秀紀 2003「筑前におけるミヤケ状遺構の成立」『先史学・考古学論究』Ⅳ、龍田考古会

Ⅱ．調査の記録

1．調査の概要

比恵145次調査地点は、比恵遺跡群中央部に位置する（Fig.1･2）。調査地点の周囲の現況標高は6.9～7.1mである。また145次調査地点は、以前に実施された比恵50次調査地点C区の南側に接し、調査区の一部が重複している（Fig.3･4）。調査区の形状はおよそ東西に細長く、既存の店舗（遊戯場）ビルの形状に沿って、中央部が狭く、東側と西側がやや幅広くなっている（Fig.4～6）。以下、報告の都合上から、「西側（調査区）」「中央（調査区）」「東側（調査区）」とする（Fig.5･6）。いずれも、現存（調査時点）店舗ビルの建設時に、基礎工事および配管敷設の掘り方により調査範囲の北側（現建物側）の一定幅が深く掘削されていた。この範囲は50次調査の際に部分的に調査されているが、当時予定されていたビルの設計上の平面範囲の外側であるとして、途中で

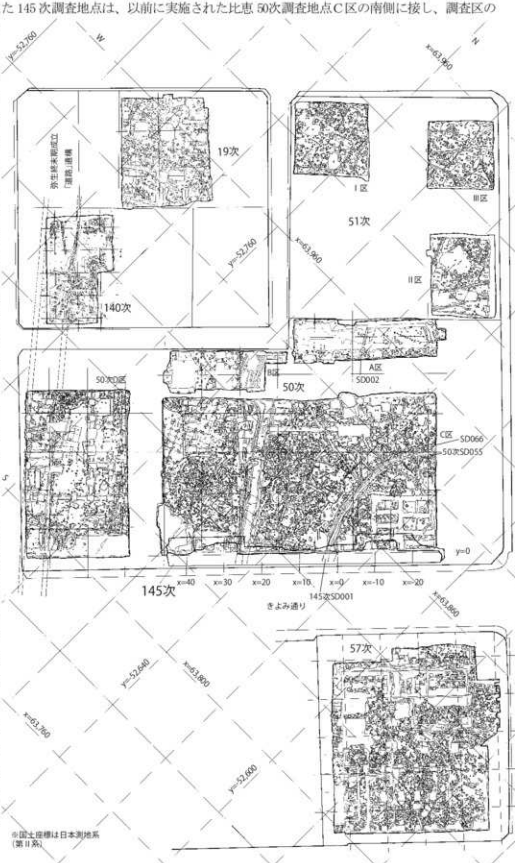


Fig.3　比恵145次と周辺の調査区位置図(1/1,000)

調査が中断されている部分（平面検出のみなど）を含む。結果として建設されたビルの外回りは遺構遺存範囲の検出レベルから60cm～120cm前後大きく掘削されており（ＰＬ．１－１～３，ＰＬ．２－１～４，ＰＬ．３－1･2、ＰＬ．７－８）、今後一定以上のビル建設工事の場合には、基礎工事の「余掘り」や外周の配管工事による掘削を考慮して（実際の掘削工事範囲を事前に確認して）、建築物の設計上の平面プランより一回り広い範囲で設定すべきであろう。このビル基礎外周工事掘削範囲（Fig.5,6の「基礎カクラン」部分）についても、比恵遺跡群では削平が顕著な場合でも井戸が遺存することがあるため、底面まで撹乱を掘削して精査した。しかし、50次調査で調査済みの遺構（50次 SE319・320・321）以外には、この基礎撹乱部分では遺構を新たに検出できなかった。ただし「西側調査区」で調査区が幅広くなる部分では、配管工事や基礎外周掘削による撹乱があったが、中央部の遺構が残存しており、この部分に50次調査で掘削済みの遺構がある範囲が確認された。これにより50次調査と145次調査の平面図を重ね合わせることができた。50次調査報告（福岡市埋蔵文化財調査報告書第451集『比恵50』）の調査区平面図は、各区（A～D区）の位置関係と周囲敷地境界との平面関係に若干の不明点や疑問があり、本報告では、50次報告の原図を参照し、かつ50次と145次で検出遺構分布が合致

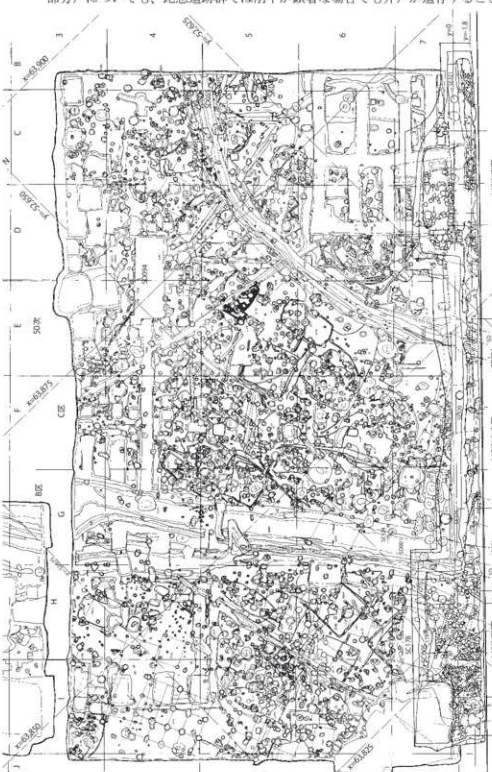


Fig.4　比恵遺跡群50次C区と145次調査区の関係（1/400）

Fig.5　比恵145次全体図(1)(1/125)　全体図(1)(1/125)

する東側調査区を鍵にして（Fig.7)、調査区の位置関係を修正している（Fig.3･4)。この図面合わせ（辻褄合わせ）には作業上、かなり労力を割いている。さらにそのようにして再検討し、修正した合成図に、145次調査時に移動してきた国土座標系（周囲の既存調査区との関係から世界測地系ではなく日本測地系第Ⅱ系を使用）を入れ込んだ。また今回の調査により、50次調査の井戸3基を再確認し（SE319～321)、50次調査の全体図におけるSE319とSE321（いずれも50次C区より外側で掘削したようになっていた）の位置の誤りが判明したので、これも修正している（Fig.4)。調査区内の撹乱は、既存ビルの基礎外周掘削

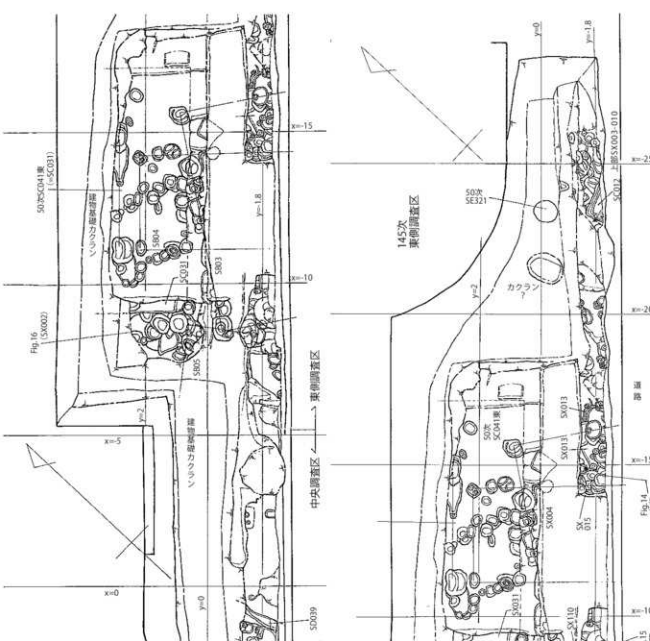


Fig.6　比恵145次全体図（2）(1/125)　全体図（2）(1/125)

や配管工事掘削によるもの以外に、調査区南辺に沿って植樹の抜根による大きな撹乱が複数あった。植樹についても遺構を大きく毀損することがあるため、工事計画にそれが入っている場合には、植樹方法によっては、調査対象範囲とするか、工事立会などを行う必要があろう。

以上のような、かつてのビル建設工事に関わる撹乱（掘削）を免れた範囲には、地表下 20 ～ 30 ㎝で地山の鳥栖ローム上面となり比較的濃密な遺構を検出した（Fig.5･6）。西側調査区ではまとまった範囲で遺構遺存部分があったが、中央調査区から東側調査区は、南側道路沿いに遺構が遺存し、また東側調査

区の幅広くなる範囲では(Fig. 7)、50 次調査の掘削済み部分と「島状」に遺構検出面レベルがやや高い状態で残っていた部分があった (Fig. 16)。調査の結果、確実な**竪穴住居**が 3 棟、その可能性があるものが 3 棟以上検出され、また柱穴が多数あり、調査時および整理時の検討の結果、20 棟以上の**掘立柱建物**など(柵列、削平竪穴住居の主柱も含むか)の存在が推定された。柱穴には土坑状の大きなものがあり(調査時は柱穴か土坑か不明なため「**SP**」ではなく「**SX**」とした遺構もある)、比較的大型の建物があった可能性がある。幅広い西側調査区では、竪穴住居 2 棟以上 (**SC005, 020** ほか)、柱穴多数(掘立柱建物復元推定多数)などを検出した。狭長な中央調査区では、その西側で中世～近世の幅広い溝 **SD022・023** (50 次の SD001 とその西側に平行する近世溝に対応)、その東側で古墳時代後期～飛鳥時代の溝 **SD001, SD038・039** (50 次 SD055) を検出したほか、柱穴群、土坑(溝・井戸を含むか)を検出した。幅が広い東側調査区では、竪穴住居 1 棟以上 (**SC031, SX102** ほか)、柱穴多数が検出され、同様に掘立柱建物が多数復元できた。検出遺構の大部分は弥生時代中期中頃(須玖 I 式新相)～古墳時代前期前半(久住 1999・2017 のⅡC期)までだが、一部に古墳時代後期～奈良時代、中世、近世前期も認められた。

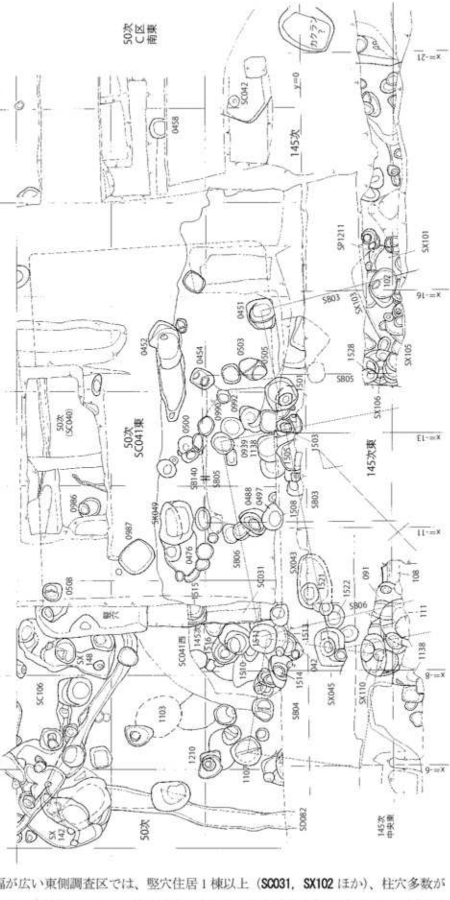
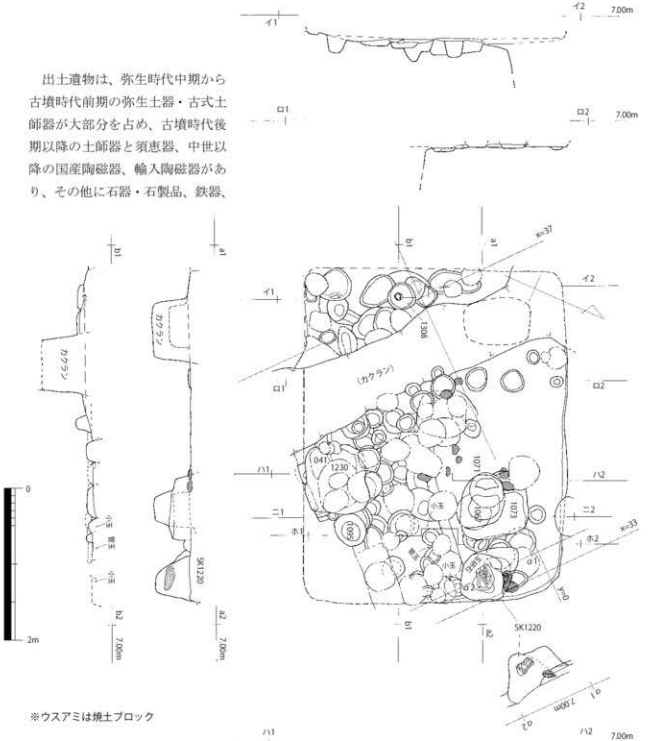


Fig.7 比恵145次東側調査区と50次C区南東部の接合(1/80)

出土遺物は、弥生時代中期から古墳時代前期の弥生土器・古式土師器が大部分を占め、古墳時代後期以降の土師器と須恵器、中世以降の国産陶磁器、輸入陶磁器があり、その他に石器・石製品、鉄器、



※ウスアミは焼土ブロック

ガラス小玉、石製管玉などが出土した。総量でコンテナケース17箱分の出土である。井戸や土坑、貯蔵穴などの略完形土器が廃棄されることが多い遺構の新たな検出はなかったので（調査区内に50次で調査済みのSE319・320・321がある）、出土土器に完形品はほとんど無く、破片資料が大部分を占めている。そのため、検出遺構

Fig.8　SC005実測図(1/50)

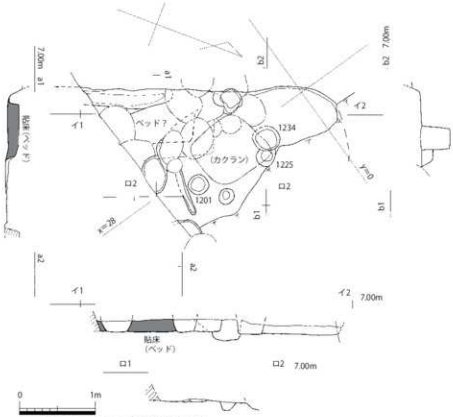


Fig.9　SC022実測図(1/50)

の濃密度の割には出土遺物総量は少なく、また報告図化遺物も、各遺構の時期比定や、遺跡展開時期幅の確認のため、比較的小さな破片も取上げている。

・調査の経過

発掘調査は平成28年8月1日に重機による掘削から始まった。ただしこれ以前に、7月28日から工事業者による調査対象区の鋤取りがあり、その工事立会が開始されている。発掘調査は、既存ビル内装解体工事と平行して行われ、発掘調査の掘削廃土は細長い調査区の東西両端まで運ばざるを得ず、調査区面積の割にはかなりの労力が必要であった。本調査のような、細長い調査区で、かつ廃土置場が限られている場合は、重機による表土掘削および人力による遺構掘削の廃土移動の作業量をより十分に考慮する必要性があると考えられる。また、既存ビル工事時の基礎外周掘削部分も井戸遺構などの深い遺構の有無を確認する必要があったので、ほぼ全て掘削したが、この掘削部分に雨水が溜まることが多かった。さらには既存ビルの一部を解体予定であったため、調査対象範

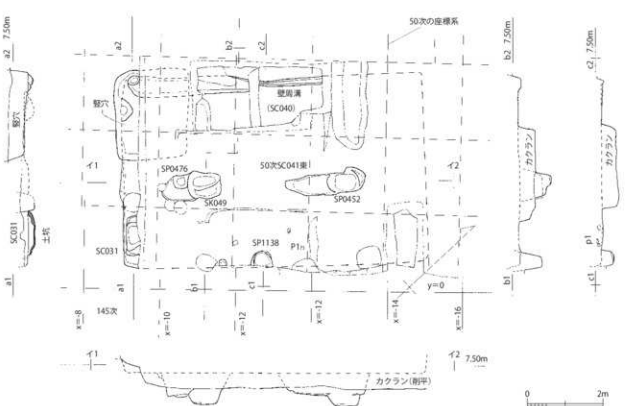


Fig.10　SC031＝50次SC041東実測図(1/100)

囲（＝ビル増築予定範囲）の排水配管を全て切断しており、降雨時には想定外の大量の雨水が一気に調査区に流入することが幾度もあった。調査途中で、排水配管の一部について敷地外に雨水を流すように工事業者に復旧してもらったものの、それでもビル上部からの雨水排水の大部分の調査区への流入は止まらず、調査中は最後まで調査区の排水作業と壁の崩落防止のための養生作業にかなりの時間と労力が割かれた。そのため、発掘調査の作業進行は厳しいスケジュールとなった。調査期間終盤には、基礎外周掘乱部分を埋めて廃土置場としたが、上記の雨水流入と排水、その対策で、基礎外周掘乱底面の精査と記録が遅れ、廃土を埋められるようになるまで時間がかかってしまった。さらに最終的に、遺構の一部は図面記録が不十分であったり、遺構を完掘できなかった部分もあることを明記しておく。そうした苦慮もあったが、平成28年9月30日に発掘調査を終了することがで

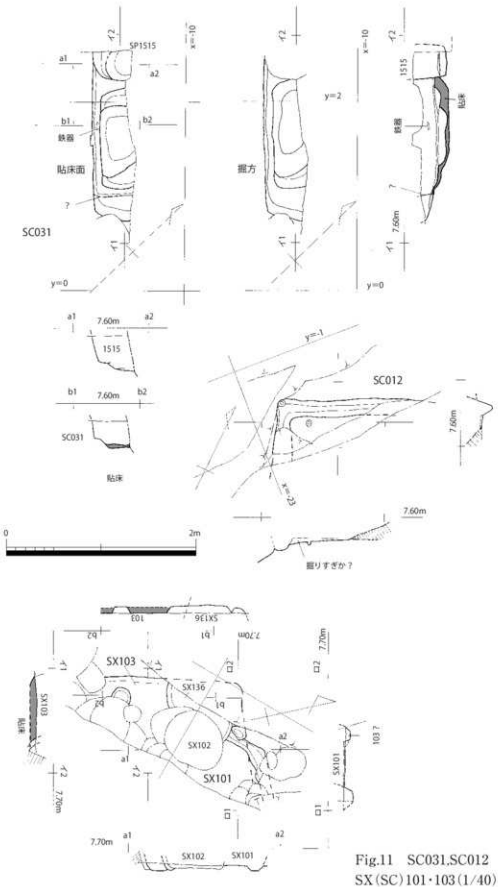


Fig.11　SC031,SC012
SX(SC)101・103(1/40)

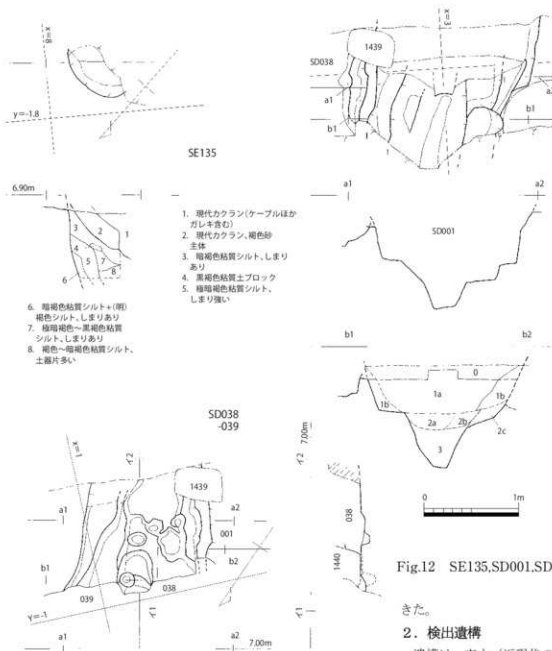


Fig.12　SE135,SD001,SD0038-039実測図(1/40)

きた。

2．検出遺構

遺構は、表土（近現代の盛土）直下、場所によってはＧＬ－15cm程度、深いところではＧＬ－30 cm前後で鳥栖ローム上面となり、そこで検出した。

（1）竪穴住居（竪穴建物；ＳＣ）

・**SC005**（Fig.8、巻頭図版1、Pl.　4～5－1･2、Pl.　6－1）

西側調査区で検出した。南辺と西辺が不明確だが、推定4.4×3.5ｍの隅丸長方形竪穴。長軸方位Ｎ－67°－Ｅ。検出面から床面まで10cm未満しか遺存しない。部分的に貼床があり、東隅1/4はいびつな形（北辺が住居中軸からずれる）だが貼床によるベッド状遺構があったらしい。このベッドの北辺周囲の床直上覆土から**東日本系磨玉製小型管玉**と**ガラス小玉**が出土した。周辺の覆土を全て洗浄し、**16点の玉類**を検出した。玉類については**34-35**頁に分析と小論がある。主柱穴は不明確だが、**SP1067 下層**か**SP1073**がまずその可能性があり、西主柱は撹乱溝で失われたか。その場合、平面プランの柱主軸が中央ではなくなるので、北側と場合によっては西側に削平されたベッド状遺構の空間があった可能性がある。この想定主柱軸の延長の竪穴東辺に**壁際屋内土坑 SK1220**があり、ここから**大型**

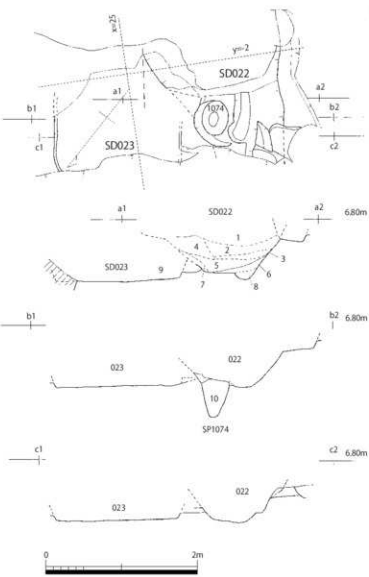


Fig.13　SD022･023実測図(1/50)

の玉砥石（Fig. 33、巻頭図版 4-5）が出土した（これも 34-35 頁に小論がある）。この土坑は一度掘り返した痕跡があり（土坑が重複）、古い土坑は長軸 95 × 70 ㎝で床面からの深さ 34 ㎝、最終的に玉砥石を廃棄した土坑は 80 × 70 ㎝、深さ 40 ㎝である。土坑の長軸が住居主軸と異なるが、焼土ブロックが床面と同様に土坑北辺上部出土し、伴うと考える。住居中央から東側にかけて、ほぼ**床直上で焼土。焼土ブロック**が分布していた。焼失住居というほどではなく、**玉類散布**を含めて一種の**廃屋儀礼**とも考えられる。SC005 は、多数の柱穴が上下に重複しており、住居に確実に伴う土器が不明確である。しかし、下部検出の大型柱穴 **SX041** に弥生後期後半の壺破片があり（Fig. 26-39）、SC005 が検出面直下で床面になることを考えると、**検出時出土の高杯（弥生終末期）**が伴うか廃絶直後と考えられる（Fig. 24-1）。**弥生中期土器は混入**だろう。**楽浪土器筒杯模倣土器（SP1308**、Fig. 28-5）も伴う可能性がある。

・**SC020**（Fig. 9、Pl.. 3 － 3･4、巻頭図版 3 － 1）　西側調査区東端検出。南側は調査区外、東側は撹乱で不明だが、南北 3. 5 m以上×東西 1. 9 m以上の隅丸長方形竪穴。深さは 15㎝の遺存。北辺を長軸として N－31° －E。北辺南側に貼床ベッドがあるが（上面は検出面直下）、新しい柱穴群に切られ遺存が悪い。ベッド部分のみ壁周溝がある。また床面に方向が異なる古い竪穴の壁周溝痕跡がある（N－ 48° －E）。出土土器（Fig. 24 － 5 ～ 8）は弥生中期（須玖Ⅰ式）主体だが混入で、ベッド状遺構の存在から**弥生後期**だろう。

・**SC031**（Fig. 10･11 上、Pl.. 7 － 5 ～ 7、巻頭図版 3 － 5･6）　東側調査区西側「島状部」（Fig. 16）で検出。当初は 1. 8 m以上× 0. 5 m以上の方形住居の一部という認識しかなかった（Fig. 11 上）。比恵 50 次の図面と合わせると、**50 次 SC041 東**（50 次 SC106 の南東側を「SC041」とする原図もあり、今回「SC041 東」とした）と同一遺構の可能性が高く、さらに北辺は 50 次「**SC040**」とする壁周溝が伴うと考えられる（Fig. 10）。**主柱**は **50 次 SK049** と **SP0452** であろう（今回調査で再掘削した）。また南辺中央は **SP1138** が**壁際屋内土坑**であろう。本調査の「SC031」部分は貼床ベッド部分で、かつ土坑状凹みがある。全体の平面プランは 8. 0 × 5. 0 mの長方形、N－ 43° －Eとなる。**出土土器**（Fig. 24 － 11 ～ 13）のうち 11, 12 は**古墳初頭（ⅡA期）**前後、

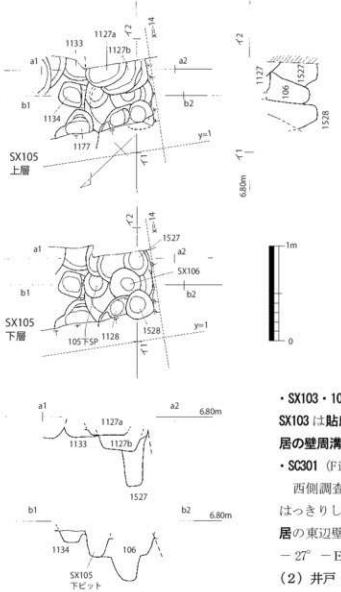


Fig.14　SX105・106ほか実測図(1/40)

50次SC041出土土器（Fig.35－4）は**終末期新相（ⅠB期）**である。**石錘2点**と**鉄製刺突具**が出土している（Fig.30-5,6、Fig.31-9）。なお当遺構は調査終了時に図面作成が不十分であったので、報告図面の一部は複数の写真から推定して起こした。

・**SC012**（Fig.11中、PL.6－3、巻頭図版4－3）東側調査区南辺の遺構集中**SX003下部**で検出。方形住居隅角の壁周溝のみ。1.5m以上×0.7m以上、N－60°－E。弥生終末期のSK（SX）010（Fig.25－23）を切る可能性があり、上部SX003で須恵器が出土し（Fig.24－41・42）、方位からもその時期に伴う可能性がある。

・**SX103・101**（Fig.9、PL.6－4・7）東側調査区南辺で検出。**SX103**は**貼床範囲**のみでN－15°－E。**SX101**は**推定円形住居の壁周溝**の一部のみ。前者は弥生後期、後者は弥生中期か。

・**SC301**（Fig.21右下、PL.3－3・4、巻頭図版3－1）

西側調査区西半で検出。多数の柱穴群に切られプランがはっきりしないが、50次でも多く検出された**小判形長方形住居**の東辺壁周溝か。東辺2.85m、東西規模は不明。東辺N－27°－E。弥生後期か。

（2）井戸（SE）

・**SE135**（Fig.12左上、巻頭図版4－1）中央調査区南辺で検出。西側に現代の撹乱があり、かつ調査区端であったので、深さ68cmまでで以下の掘削を断念した。覆土土層の落込み方や、遺物出土状況、かつ湧水があることから井戸と判断した。径1.0m前後の**円形素掘り井戸**だろう。出土土器（Fig.24－14～18）から、**弥生終末期**までの埋没と判断する。

（3）溝状遺構（SD）

・**SD001**（Fig.12右上、巻頭図版4－2、PL.7－9・8－3）中央調査区で検出。**50次SD055の延長**。上面検出幅150～170cm、深さ100～105cm。断面を検討すると、**本来V字形**に近い溝があり、その後中位より上を**逆台形に掘り返した**可能性がある。出土土器は、**上層～中層上位**（Fig.24－19～33）は**古墳後期～飛鳥前期**（ⅢA期からⅣ期）までだが、**中層下位～下層**（Fig.24－34～39、Fig.25－1～3）は弥生後期～古墳初頭が主体である。50次SD055は「6世紀後半から7世紀初めにかけての遺物がまとまって出土」と報告されているが、中層以上ではないかと疑われる。50次SD055は北側でSD066を切るが、SD066はSD055の方向に自然につながる（Fig.4）。SD055の平面プランは、溝が平行して重複しているようなところがあり、おそらく**弥生後期に溝が掘削**され、その埋没ラインに沿って**古墳後期中頃（ⅢA期＝TK10期）に再掘削**したものと判断する。そのように考えると、**弥生後期初頭～前半の50次SB249、SC106**などの軸線が理解できる。

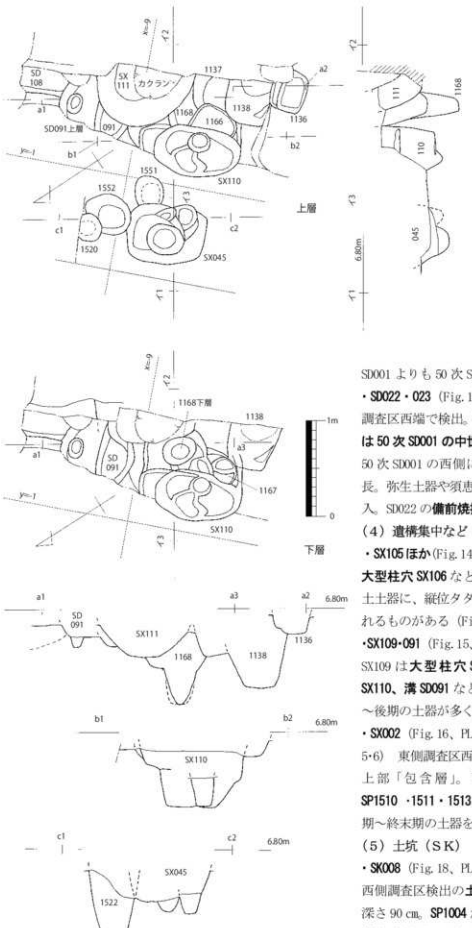


Fig.15　SX109,SX110周囲・下部遺構実測図(1/40)

・SD038・039（Fig.12 左 下、PL. 7 － 9・8 － 4） SD001 の東側で検出。幅 140 ㎝前後、深さ 24 ㎝（SD039） ～ 36 ㎝（SD038）。この溝も**50 次 SD055 東側部分の延長**と考えられる。**SD039** は**SD038 以前の溝**だが、一連の溝の掘り返しと考えられ、SD038 の幅が狭くなる（100 ～ 130 ㎝）。**出土土器**（Fig.25 － 11 ～ 17）に**Ⅳ期**（飛鳥Ⅰ期 ～Ⅱ期中相併行）**の須恵器**があり、**SD001 より新しく**、SD001 よりも 50 次 SD055 の主体時期に近い。

・SD022・023（Fig.13、巻頭図版 3 － 1･2） 中央調査区西端で検出。SD023 が SD022 を切る。**SD022 は 50 次 SD001 の中世後半の溝の延長**で、**SD023** は 50 次 SD001 の西側に平行する**近世以降の溝**の延長。弥生土器や須恵器が多く出土するが、全て混入。SD022 の**備前焼擂鉢**は伴うもの（Fig.25 － 4）。

（4）遺構集中など（SX）

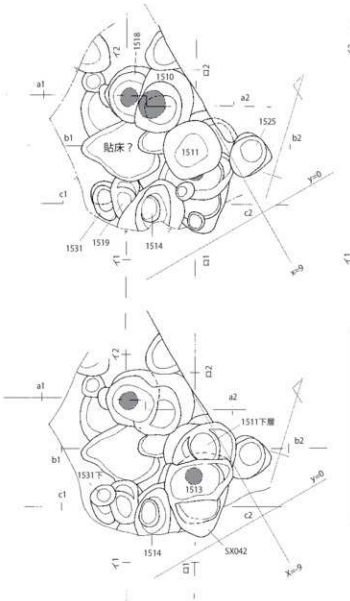
・SX105 ほか（Fig.14、PL. 3 － 3･4、巻頭図版 3 － 1） **大型柱穴 SX106** など**柱穴群**の上部「包含層」。出土土器に、縦位タタキの**韓半島系軟質土器**と見られるものがある（Fig.25 － 32）。弥生終末期か。

・SX109・091（Fig.15、PL. 3 － 3･4、巻頭図版 3 － 1） SX109 は**大型柱穴 SX110・SP1138・SP1168、土坑 SX110、溝 SD091** などの上部「包含層」。弥生中期～後期の土器が多く出土（Fig.25 － 24 ～ 26）。

・SX002（Fig.16、PL. 7 － 3 ～ 5、巻頭図版 3 － 5･6） 東側調査区西部「島状部」遺構群検出時の上部「包含層」。下部に **SC031** や、**大型柱穴 SP1510・1511・1513・1514・1518** がある。弥生中期～終末期の土器を出土（Fig.25 － 18 ～ 22）。

（5）土坑（SK）

・SK008（Fig.18、PL. 5 － 3･4、巻頭図版 3 － 1） 西側調査区検出の**土坑状大型柱穴**。95 × 105 ㎝、深さ 90 ㎝。**SP1004** が新しい**柱痕**（**抜痕**）ないし新柱穴だが、それ以前の柱痕がある。**複数柱穴**



の集合。**SP1003・1006に切られ、SP1005を切る**。出土土器は**弥生後期中頃～終末期が多く**、上層に古墳初頃も一部含む（Fig.26－1～11）。

（6）掘立柱建物（SB）

掘立柱建物の復元は調査中できたものと整理時に図上で行ったものがあるが、後者は単に柱筋だけでなく、底面の深さや覆土の特徴（ほぼ全ての柱穴でメモを記録している）で矛盾が少ないように復元推定している。

SB02（Fig.17）は**大型柱穴**4個で構成される1×1間、3.4×4.0mの建物。N－33°－W。柱間が広いが柱穴掘り方が深く、**楼観（物見櫓）状建築**か。比恵139次SB01に近い例がある。**弥生後期後半**か。**SB01**（Fig.19）は東西3.2m×南北1.1mの**L字状柱列**。N－58°－E。図示した柱穴は伴わないものもあり（SP1038はFig.17に図示した浅い最初の検出時のものが伴うか）、SP1038上層-SP1046、1038-SP1041-SP1043（または1038-SP1072-SP1040-SP1043が古い柱列か）が伴う柱列か。建物というより**「区画」の隅角を示す柵列**だろう。伴う可能性のある柱穴出土土器から、**弥生終末**と**古墳初頭**の2時期だろう。**SB03**（Fig.20上）は南北4間×1間以上、7.4×1.4m以上、N－34°－W。東西の規模（間数）によっては大型建物の可能性もある。**SP1501**出土土器（Fig.28－35～39）から弥生後期後半。**SB04**（Fig.20右下）は1×1間、

Fig.16　東側西部島状部遺構群（SX002）実測図（1/40）

2.3×2.4mの小規模建物。N－40°－E。小型高床倉庫か。SX110出土土器から**弥生終末期**だろう。**SB05**（Fig.20左下）は梁間1間×3間（以上?）、3.1×3.6m（以上?）、N－46°－W。**SP1528**が**SX106を切る**ので、SX106の時期幅（Fig.25－33～35）の下限（弥生終末期）より新しい。SC031（50次SC041東）以後か。**SB08**（Fig.21右上）は柱間3.5m、N－45°－E。削平された**弥生後期以降の二本主柱竪穴住居の可能性**があるが、2柱穴とも須玖Ⅰ式の土器片で占められ、南北いずれかに展開する掘立柱建物の一部の可能性もある。

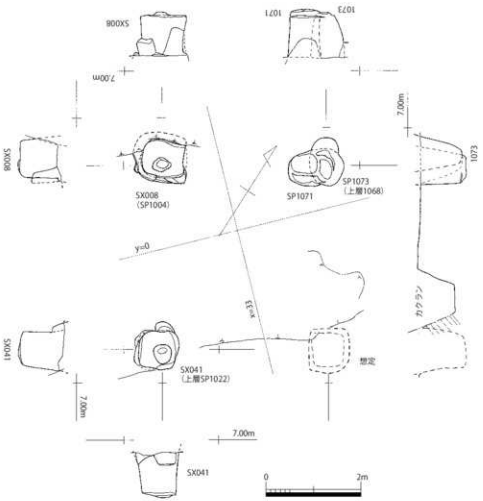


Fig.17　SB02実測図

SB09・10・11（Fig.21左）のうち、**SB09**は4間・10.1m、N－40°－Eの**大型建物**の一部。**SB10**は、2間・5.4m、N－41°－E。**SB11**は、2間・6.5m、N－40°－E。3棟の柱列ともに南北いずれかに折り返して展開する掘立柱建物の一部だろう。方位がほぼ同じかつ、一部の柱穴が重複しており、連続的な展開を示す可能性があるが、このうち**SB10**は、**SP1433**出土土器から**古墳初頭（ⅡA期）**、しかし他の2棟（**SB09・11**）は柱穴出土土器からは**弥生後期初頭～前半**の可能性が高い。**SB07**（Fig.21下）は推定梁間3間×1間以上、2.8

Fig.18　SK008（SP1004ほか）実測図（1/60）

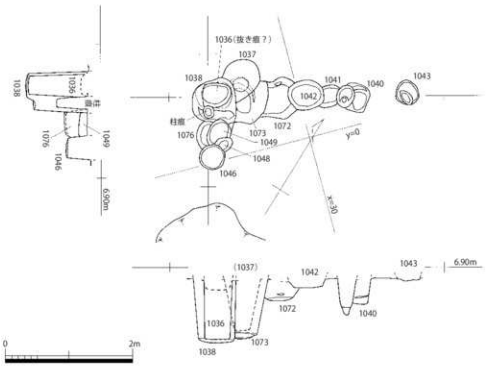


Fig.19　SB01実測図(1/60)

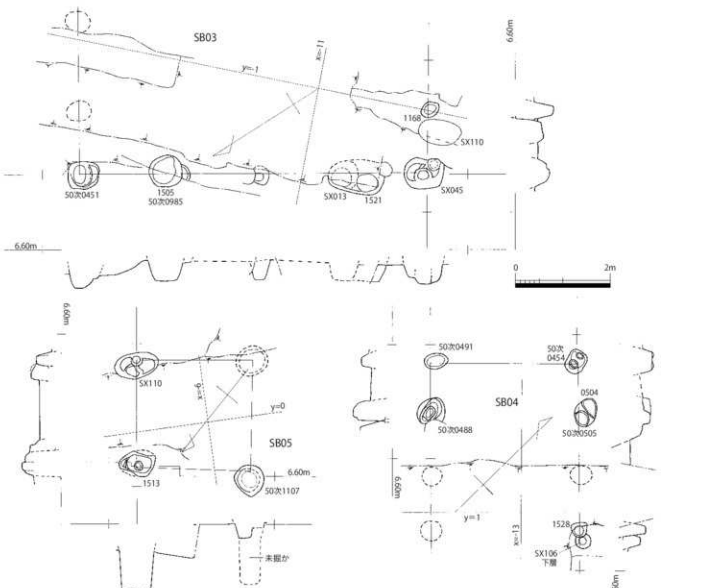


Fig.20　SB03・04・05実測図(1/80)

×1.2ｍ以上、Ｎ－24°－Ｗ。**SP1411** 出土土器から**弥生終末期～古墳初頭（ＩＢ～ⅡＡ期）**。**SB12**（Fig.21右中）は１×１間、3.6×4.2ｍ、Ｎ－58°－Ｅ。柱間が広いが全てが深い柱穴ではなく、非高床の**平屋建物の可能性**。**SP1035** 出土土器(Fig.26－29～34）から**古墳初頭（ⅡＡ期）**。**SB19**（Fig.21右下）は東西２間×１間以上、5.6

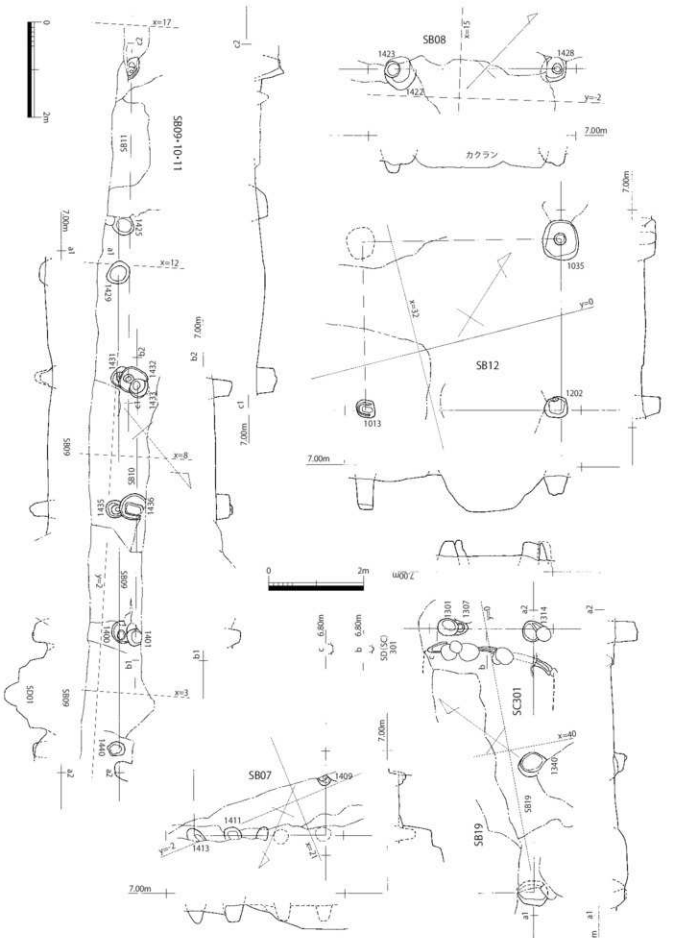


Fig.21　SB08,SB09・10・11,SB12,SB07,SB19,SC301実測図(1/80)

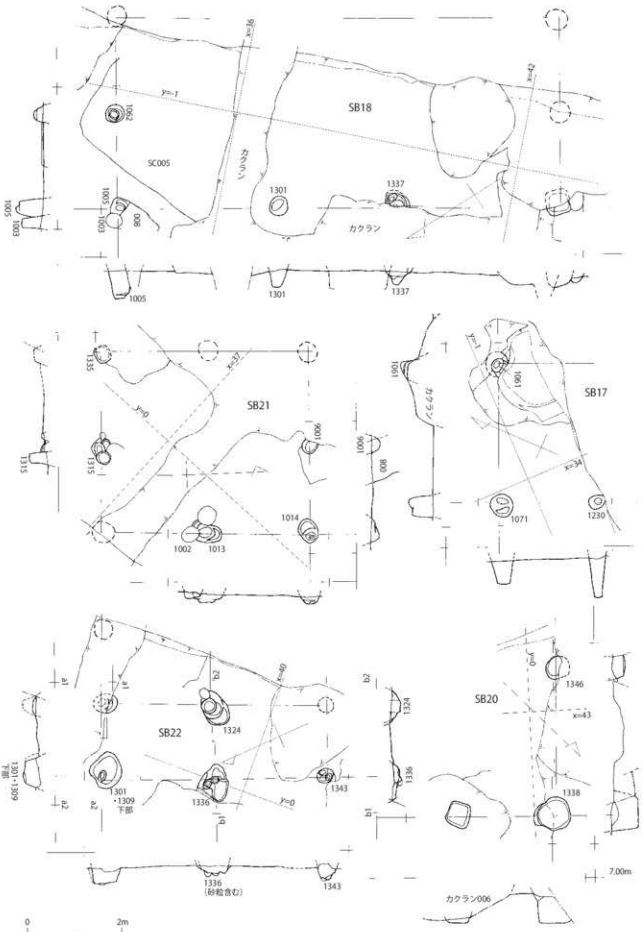


Fig22　SB18,SB21,SB17,SB22,SB20実測図(1/80)

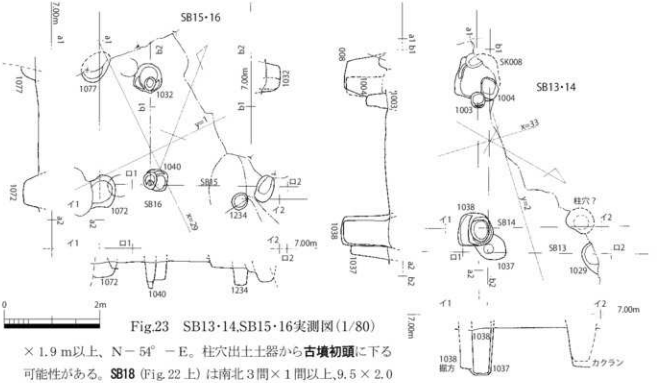


Fig.23　SB13・14,SB15・16実測図(1/80)

×1.9 m以上、N－54°－E。柱穴出土土器から**古墳初頭**に下る可能性がある。**SB18**（Fig. 22 上）は南北３間×１間以上、9.5×2.0 m以上。N－33°－E。大型建物の可能性。**SP1005** と **SP1301** 出土土器から**弥生後期後半～終末期**の間。**SB21**（Fig. 22 左中）は２×２間、3.8×4.4 m、N－2°－W。**SP1014** に古式土師器片があり**古墳前期**の可能性があるが、柱穴が小規模で**方位も他と異なり、飛鳥時代に下る可能性**。**SB17**（Fig. 22 右中）は１×１間以上、2.95×2.1 m以上、N－23°－W。**SP1071・1230** に**古式土師器**片があり、**搬入手焙り形土器**（Ph. 1-2）の型式観から**古墳前期前半**。**SB22**（Fig. 22 左下）は、現状２×１間、4.8×3.5 mだが、２×２間の総柱建物の可能性。N－33°－E。ただし **SP1324** のみ古墳後期～飛鳥の土器片があり伴わない可能性あり。他は**古墳初頭**まで。**SB20**（Fig. 22 右下）は１×１間以上、3.1×2.1 m以上、N－4°－E。西側の柱穴は撹乱と一緒に掘削してしまい所属遺物が不明。**SP1338** は50次調査時に掘削された痕跡があり、弥生中期土器片があるが伴うか不明。**SB15・16**（Fig. 23 左）のうち、**SB16** は１×１間（以上？）、2.75×3.4 m（以上？）、N－21°－W。**SB15** は１×１間（以上？）、2.0×2.5 m（以上？）、N－21°－W。**SB16** の **SP1072** に**古式土師器**片が多い（Fig. 27－41～44）。**SB15** の **SP1040** にも**古式土師器**片がある。**古墳初頭～古墳前期前半**。**SB13・14**（Fig. 23 右）のうち、**SB13** は１×１間（以上？）、3.4×2.3 m（以上？）、N－22°－W。**SB14** は１×１間（以上？）、2.7×2.2 m（以上？）、N－21°－W。**SP1003・1004** が **SK008 を切り、弥生終末期以降**。SB14 の北側は撹乱の落ちだが、50 次調査時の柱穴掘削痕跡と判断した。

３．出土遺物

（1）土器（Fig. 24～29）

紙幅の都合上、説明ができない。挿図中に、各遺物の出土遺構・層位と最低限の説明を略して入れている。以下**凡例**を示す。なお**Fig. 28-5**（Ph. 1-2）は器形と調整から**楽浪土器筒杯の模倣品**と判断した。橙色を呈する。また、**Fig. 27-15** は**近畿系手焙り形土器**の**搬入品**と判断したので、図は誤りである（**Ph. 1-2**）。淡灰色。

＜凡例＞「弥」＝弥生土器（弥生時代）、「前」＝前期、「中」＝中期、「後」＝後期、「末」＝終末期、「初」＝初頭、「古」＝古墳時代、「飛鳥」＝飛鳥時代、「土師」＝土師器、「須」＝須恵器、「Ｂ系」＝伝統的Ｖ様式系（変容含む）土器（久住猛雄 1999・2017）、「弥中」＝弥生中期、「弥後」＝弥生後期、「弥末」＝弥生終末期、「中末」＝中期末、「後初」＝後期初頭、「中末－後初」＝中期末～後期初頭、「中－後」＝中期～後期、「後－末」＝後期～終期末、「古初－前」＝古墳初頭～前期、「後前」＝後期前葉、「後中」＝後期中頃、「後後」＝後期後葉、「古初」＝古墳初頭（久住 1999・2017 のⅡＡ期）、「古前」＝古墳前期、「精Ｂ」＝精製器種Ｂ群技法・胎土土器群（古式土師器）「Ａ系」＝在来系土器
※久住 1999「庄内式併行期における北部九州の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅨ、久住 2017「福岡県（糸島・早良・福岡平野）」『九州島の古式土師器』第 19 回九州前方後円墳研究会（長崎大会）発表要旨集・基本資料集

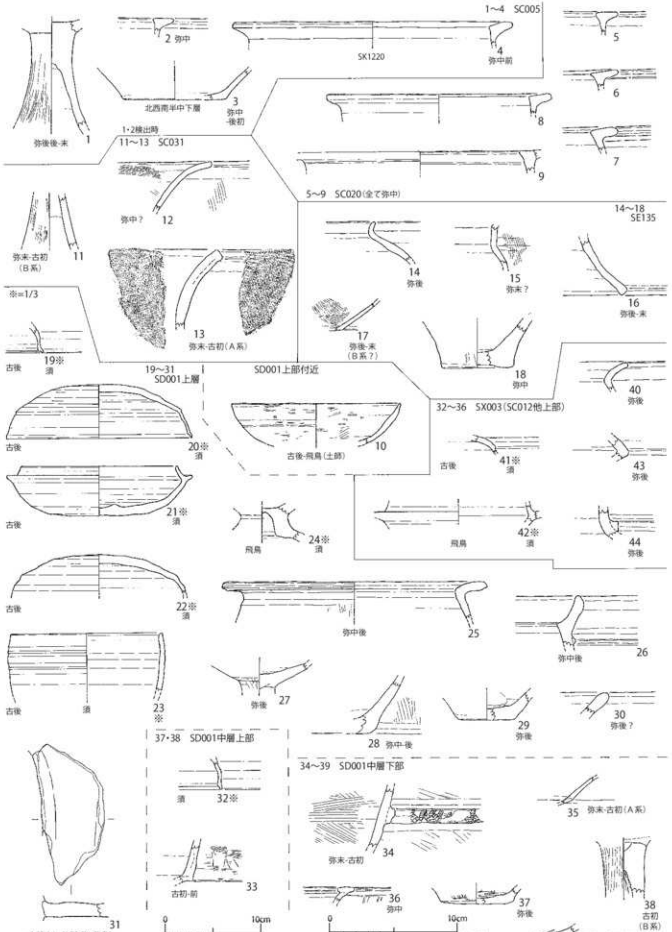


Fig.24　土器実測図(1)(1/4, 1/3)　竪穴住居(SC)、井戸、遺構集中SX、SD001(1)出土

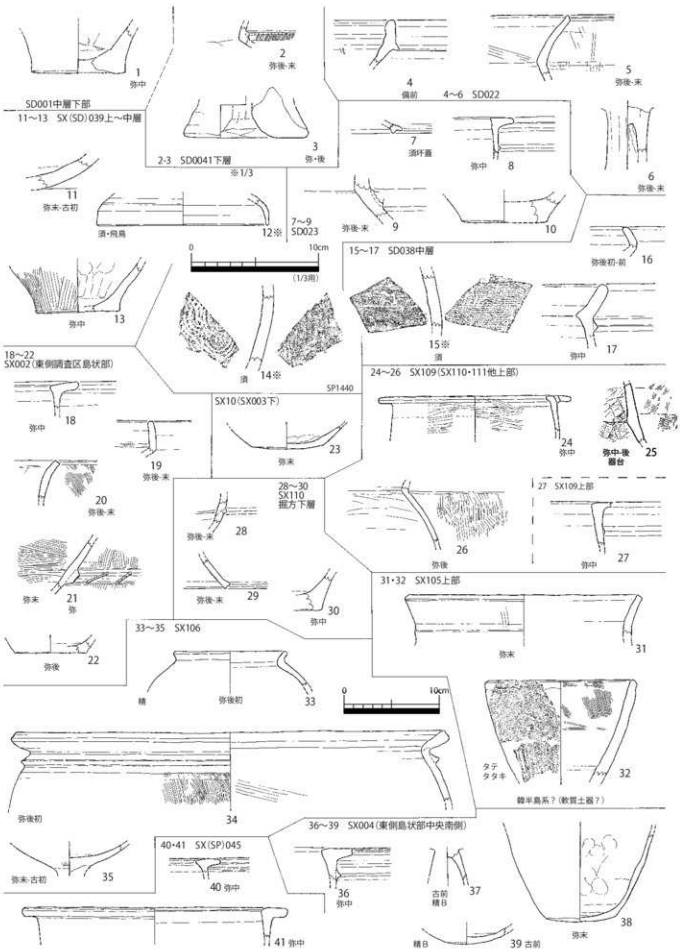


Fig.25　土器実測図(2)(1/4, 1/3)　SD001(2)他溝状遺構, 土杭, 遺構集中上部(SX)出土

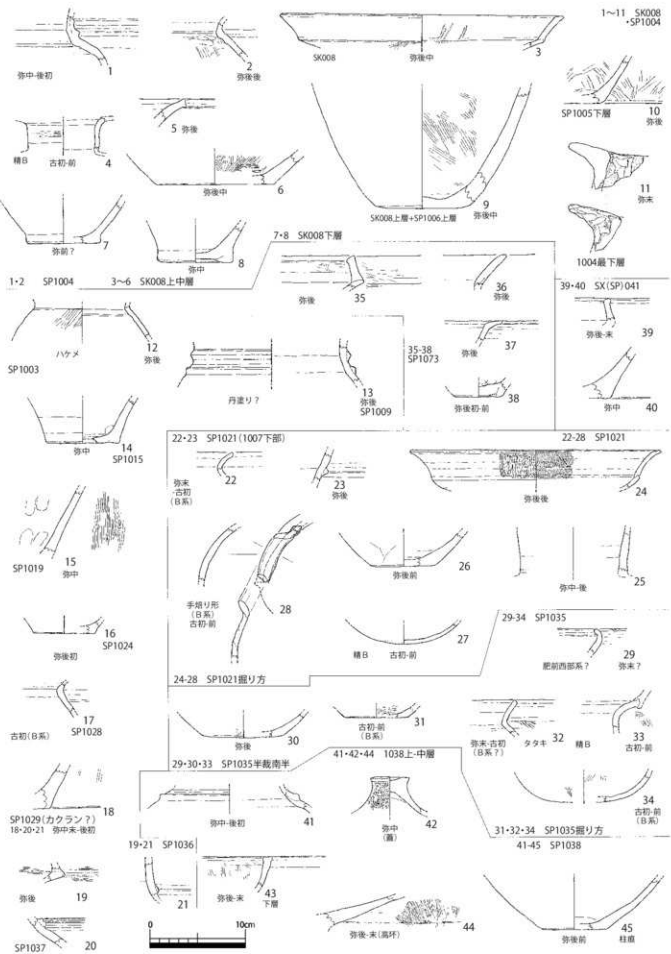


Fig.26　柱穴出土土器(1)(1/4)

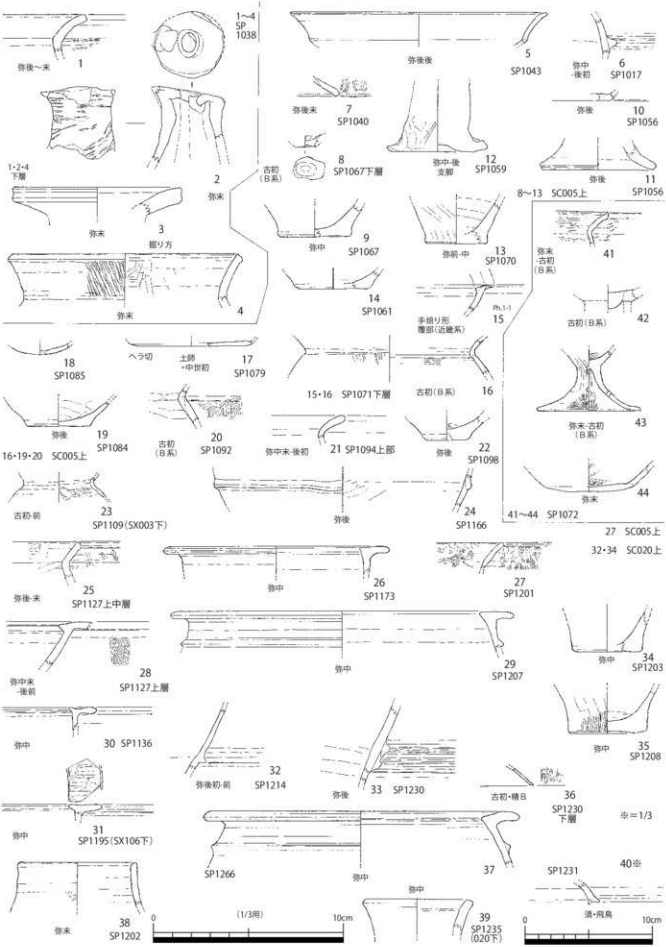


Fig.27　柱穴出土土器(2)(1/4, 一部1/3)

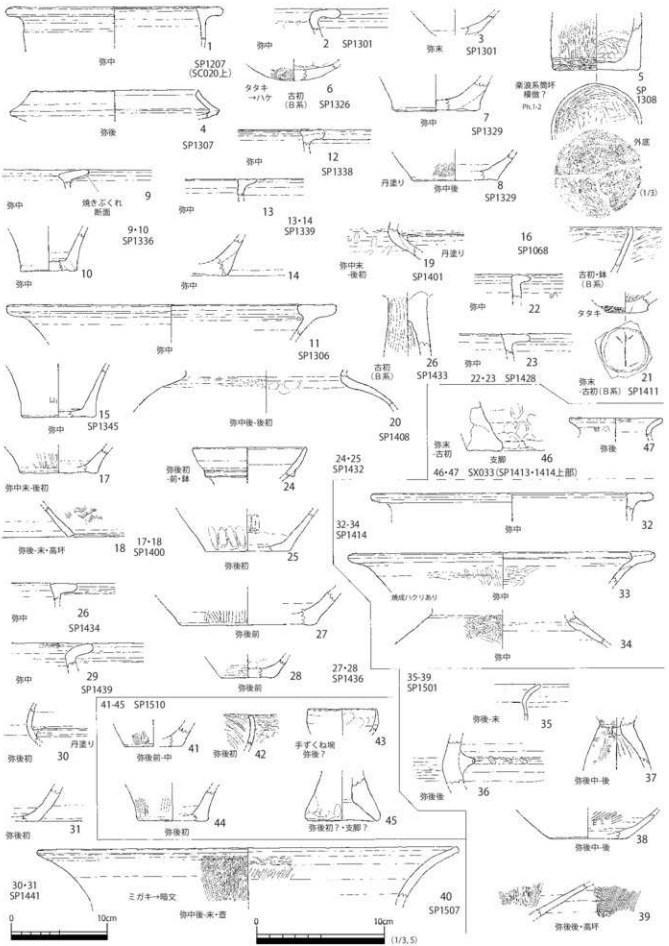


Fig.28　柱穴出土土器（3）(1/4, 一部1/3)

（２）石器（Fig.30・31、ＰＬ.３－５～10）

1（Fig.30）は、凝灰岩ホルンフェルス製の**石製凝滴具**（石包丁）。剥離整形後、敲打・研磨を加え、外反する両刃の半月形から杏仁形に仕上げる。穿孔は裏面から主に行われ、片側穿孔の可能性が高い。**弥生時代後期**中頃前後か。残存長5.25㎝、残存幅5.2㎝、残存最大厚0.85㎝、23.40g。**2**は、凝灰岩ホルンフェルス製の**磨製石剣**の茎か。剥離整形後、敲打、研磨を加え仕上げる。残存長4.35㎝、残存幅3.25㎝、残存高0.8㎝、19.03g。**3**は、扁平楕円形の川原石を素材とした**叩石**で、上下左右の側縁や表裏に使用敲打痕が顕著にみられ、堅果類を砕い

Ph.1-1　近畿系手焙り形土器覆部？（Fig.27-15）

Ph.1-2　楽浪土器筒坏模倣土器？（Fig.28-5）

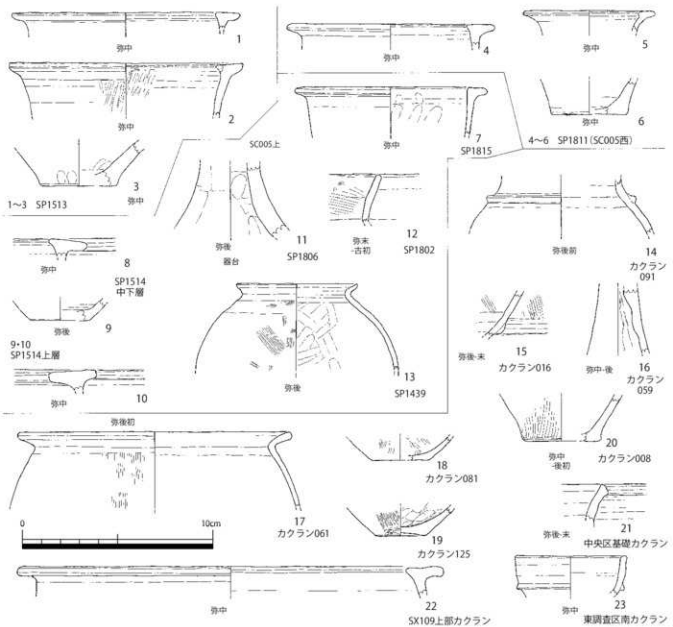


Fig.29　柱穴出土土器（４）、撹乱ほか出土土器（1/4）

たものか。器面は一部研磨が加えられるが、使用による摩耗もある**磨石**でもある。器長 10.35 cm、幅 6.1 cm、最大厚 3.7 cm、中央凹部最少厚 3.25 cm、重さ 426.57 g。**5** は花崗岩製の**石錘**。粗割りで長方形に整形、剥離加工・研磨を加えて角をとり、中央に打欠き溝を一巡させる。全体的に摩耗し礎石の可能性もあるが、**縦網の錘**に使用か。器長 12.5 cm、幅 8.6 cm、最大厚 7.5 cm、重さ 1135.54g。**9**（Fig. 31）と共に **SC031** 出土。**SC031** は漁撈刺突具（ヤス）の可能性のある鉄器（Fig. 38 － 6）も出土し興味深い。**4**（Fig. 38）は花崗岩製の**石錘**。粗割りで台形体に整形し、中央付近の二辺の三つの角を紐懸けのため打欠く。一部のみの摩耗から、木材に固定した**礎石**として使用か。器長 15.75 cm、幅 10.55 cm、最大厚 7.25 cm、重さ 1728.21 g。9（Fig. 31）も花崗岩製の**石錘**。5とセットをなす。自然石の形状を活かし、あまり加工されず、紐懸け痕が残る。1092.98g。**10** は凝灰岩ホルンフェルス製**石製穂摘具**の破片。穿孔は残存せず図上の位置は推定。法量的に弥生中期か。29.47g。石器は他に、**SP1339** などで凝灰岩ホルンフェルス製の**石剣片２点**があり、**SX002** には**西北九州産黒曜石製石核**がある。この石核は先土器時代ナイフ形石器文化期の石核を弥生時代

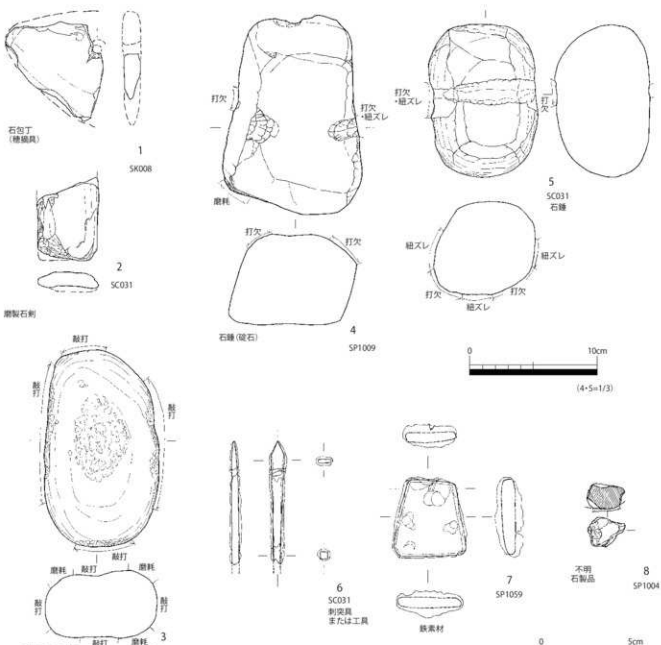
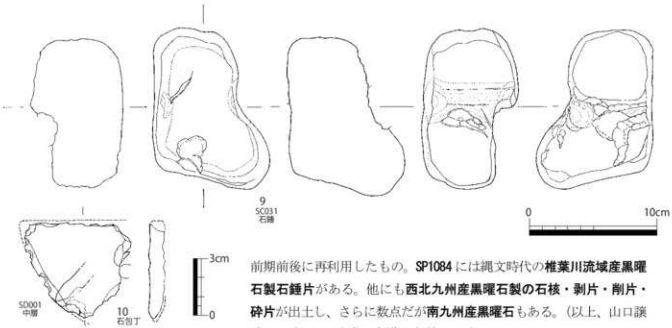


Fig.30　比恵145次出土石器実測図(1)，鉄器実測図(1/2，1/3)



前期前後に再利用したもの。**SP1084**には縄文時代の**椎葉川流域産黒曜石製石錘片**がある。他にも**西北九州産黒曜石製の石核・剥片・削片・砕片**が出土し、さらに数点だが**南九州産黒曜石**もある。(以上、山口譲治の原稿を元に久住が編集・加筆した。)

Fig.31　石器実測図(2)(1/3, 1/2)

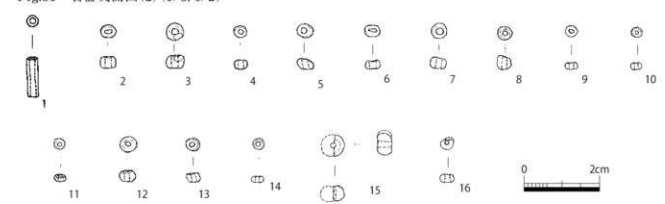


Fig.32　SC005覆土出土　管玉・小玉実測図(実大)

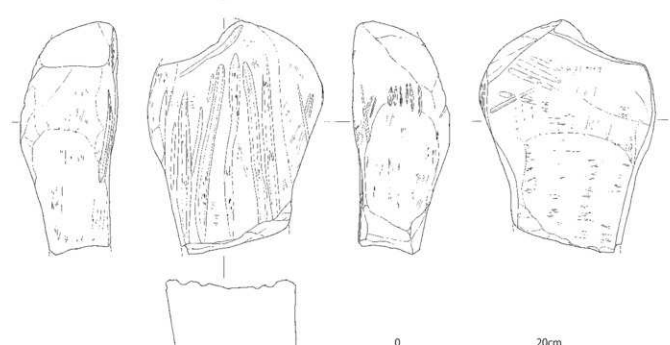


Fig.33　SC005屋内土坑(SK1220)出土　玉砥石実測図(1/5)

(3) 比恵遺跡群 145 次調査出土の玉類・玉砥石について

谷澤亜里[1]・松園菜穂[2]
[1] 九州大学附属図書館付設教材開発センター、[2] 福岡市埋蔵文化財センター

比恵遺跡群 145 次調査では多数の玉類と筋砥石 1 点が出土している。以下では、これらの資料について報告し、その位置づけについて若干の考察を行いたい。

（1）玉類（Fig. 32-1～16、巻頭図版 4-4）

碧玉製管玉 1 点、ガラス小玉 15 点が出土している。計測値、出土位置等は**表 1** に示す。以下、観察・調査結果を種類ごとにまとめて述べる。

①碧玉製管玉

やや褐色味を帯びた**濃緑色**を呈す石材を素材とし、目視だが「**女代南 B 群**」と推定する（大賀克彦2010）。両端面は孔に直交する面とわずかに斜行する。**両面穿孔**で、孔内には回転痕が明瞭に確認されることから（Ph. 2）**穿孔具は石製**と判断される。このことから、製作時期は穿孔具の鉄器化以前の**弥生時代中期**に遡る可能性が高い。

Ph. 2　管玉孔内顕微鏡写真

②ガラス小玉

15 点全てで孔と平行する気泡の動きがみられ、**引き伸ばし技法**での製作である。法量は直径 3mm 弱～5mm 程度におさまり、色調は淡青色透明と青紺色透明の 2 種類がみられる。

これらの資料の位置づけをより明確にするため、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置を用いた材質調査を行った。弥生時代から古墳時代のガラスは、融剤等の相違に基づく基礎ガラスのヴァリエーションと着色剤のヴァリエーションの精緻な分類体系が構築されている（肥塚ほか2010）。今回の調査では様々な制約により定量値の算出は行わず、非破壊での定性分析の結果から、先行研究で設定されているガラスの種類のいずれに当たるかを判断することとした。分析条件は以下の通りである。

分析装置：微小部領域用エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置（AMETEK EDAX 社製／Orbis）／対陰極：ロジウム（Rh）／検出器：シリコンドリフト検出器／印加電圧：20kV・電流：1000μA／測定雰囲気：真空／測定範囲：0.3mmφ／測定時間 120 秒

分析結果では、全ての個体でカリウムの強いピークが確認され、**カリガラス**と判断された（Fig.34）。着色剤に関連する元素の検出状況は、色調と対応して 2 パターンが確認される。淡青色の 13 点は、銅の明瞭なピークと鉄、鉛のピークがみられる（Fig.34-左）。一方、青紺色の 2 点は、マンガン、鉄の明瞭なピークとコバルトの存在が確認される（Fig.34-右）。以上の着色因子は、弥生時代後期のカリガラスに普遍的である（肥塚 1995、肥塚ほか2010）。なお、近年、弥生時代後期のカリガラスのなかでも、コバルト着色のものと銅着色のもので基礎ガラスが微妙に異なり、銅着色のものの方が酸化アルミニウムの含有量が多いと指摘されている（肥塚ほか2010）。今回の分析では定量値を算出していないため厳密な議論はできないが、分析結果のアルミニウムのピークの相対的な大小は、先行研究の指摘と矛盾しない。

（2）玉砥石（筋砥石）（Fig. 33、巻頭図版 4-5）

SC005 屋内土坑 SK1220 から出土した砥石である。**砂岩**製で、両小口を欠損・磨滅するが、本来は両側面が砥ぎ減りによってくびれる長方形状であったと考えられる。全体の法量は残存長 30.7cm、最大幅 23.3cm、最大厚 12.9cm、重さ 10.87kg。裏表と両側面の四面で砥面としての利用が確認できる。表面には 7 条の断面 U 字形の溝状研磨痕がみられ、筋の最大幅は 2cm、深さは最大で 0.65cm を計る。これらの筋のうち 6 条は砥石の長軸と平行方向に走るが、1 条は小口部分の欠損に沿う。表面には以上の筋の他にも、幅 0.5cm でわずかに窪む程度の浅い溝状研磨痕と、幅 0.5cm で断面逆三角形状の筋が数条ずつみられる。右側面にも 6 条の筋がみられるが、幅 0.4～0.65cm とやや幅狭で、表面よりもやや断面が鋭利な逆台形状を呈する。裏面にも砥石の短軸にやや斜交して 5 条の筋がみられる。このうちの 4 条は、幅 0.7cm 程度で断面が浅い U 字形を

表 1　比恵 145 次出土玉類観察表

挿図番号	番号	器種	色調	径(mm)	厚(mm)	重量(g)	出土位置等	基礎ガラス	着色剤
1	03	碧玉製管玉	濃緑	3.00	10.25	0.135	(西)SC005 管玉003	カリガラス	Cu(Fe・Pb)
2	01	ガラス小玉	淡青	4.10	3.00	0.050	(西)SC005 小玉001	カリガラス	Cu(Fe・Pb)
3	02	ガラス小玉	淡青	4.60	3.45	0.090	(西)SC005 小玉002	カリガラス	Cu(Fe・Pb)
4	04	ガラス小玉	淡青	3.40	2.20	0.290	(西)SC005上 SP1015 小玉004	カリガラス	Cu(Fe・Pb)
5	05-1	ガラス小玉	淡青	4.00	2.70	0.041	(西)SC005 南東フクエ	カリガラス	Cu(Fe・Pb)
6	05-2	ガラス小玉	淡青	3.90	2.40	0.030	(西)SC005 南東フクエ	カリガラス	Cu(Fe・Pb)
7	05-3	ガラス小玉	淡青	3.90	3.00	0.043	(西)SC005 南東フクエ	カリガラス	Cu(Fe・Pb)
8	05-4	ガラス小玉	淡青	3.60	3.50	0.049	(西)SC005 南東フクエ	カリガラス	Cu(Fe・Pb)
9	05-5	ガラス小玉	淡青	2.90	1.70	0.017	(西)SC005 南東フクエ	カリガラス	Cu(Fe・Pb)
10	05-6	ガラス小玉	淡青	2.80	1.80	0.016	(西)SC005 南東フクエ	カリガラス	Cu(Fe・Pb)
11	06	ガラス小玉	淡青	3.00	1.80	0.017	(西)SC005 南東フクエ	カリガラス	Cu(Fe・Pb)
12	07	ガラス小玉	淡青	4.20	3.00	0.057	(西)SC005 中央（北東）(SP1071西壁面	カリガラス	Cu(Fe・Pb)
13	08	ガラス小玉	淡青	3.40	2.30	0.031	(西)SC005 南東部フクエ(ベット上)	カリガラス	Cu(Fe・Pb)
14	10	ガラス小玉	青紺	2.90	1.50	0.070	(西)SC005南半（西）フク土(やや下層)	カリガラス	Co(Mn・Fe)
15	09	ガラス小玉	淡青	(4.40)	(3.85)	0.016	(西)SC005床面SP1001	カリガラス	Cu(Fe・Pb)
16	11-12	ガラス小玉	青紺	(3.60)	(2.00)	0.034	(西)SC05 北西-南半(-中央)フク土	カリガラス	Co(Mn・Fe)

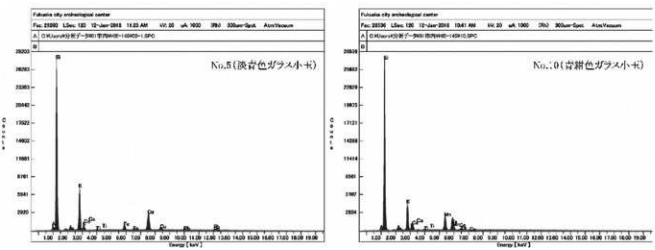


Fig. 34　ガラス小玉の蛍光 X 線分析結果

呈すが、もう 1 条は幅 0.6cm で断面三角形を呈し、前者のうち 1 条と交わる。全ての筋が玉の研磨に用いられたとは考え難いが、**表面の幅広の筋は玉の研磨**に用いられた可能性を想定できる。

（3）考察

玉類は全て **SC005** からの出土だが、**ガラス小玉は墳墓では弥生時代後期前半～中頃に普遍的**な種類、**管玉は弥生時代中期**に製作されたと考えられる。やや細長い法量から**東日本系**の可能性がある（大賀克彦 2010）。SC005 は**弥生時代終末期**に位置づけられるが、同様な種類構成のガラス小玉が住居から出土する事例は、井尻 B 遺跡 32 次調査（谷澤 2015）などでも確認でき、**集落では弥生時代後期～終末期にもこれらの種類のガラス小玉が存在**している可能性は考えておく必要がある。筋砥石も SC005 からの出土で、**玉作関連資料**と理解しうる。ただし**石材や剥片等は伴わず**、SC005 自体が工房として利用されていたとは考え難い。

比恵遺跡群からは第 4 次調査（瑞穂遺跡）でも筋砥石と「碧玉」剥片の出土が報告されており（日本住宅公団 1980）、遺跡群内で玉作が行われていた可能性は高い。弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の北部九州地域では、潤地頭給遺跡や城野遺跡をはじめとして花仙山産碧玉を用いた管玉生産や、水晶製玉類の生産が行われており（江野 2016）、比恵遺跡群で玉生産が行われていたなら、類似した内容と予想される

＜参考文献＞

江野 道和 2016「北部九州の玉―糸島と博多湾岸地域の玉作―」『玉文化研究』第 2 号，207-223 頁

大賀 克彦 2010「女代南 B 群碧玉製管玉に関する考察」
『中原遺跡Ⅳ』佐賀県教育委員会、佐賀県文化財調査報告書第 182 集

肥塚 隆保 1995「古代硅酸塩ガラスの研究―弥生～奈良時代のガラス材質の変遷―」『文化財論叢Ⅱ：奈良国立文化財研究所創立 40 周年記念論文集』929-967 頁

肥塚 隆保・田村 朋美・大賀 克彦 2010「材質とその歴史的変遷」『月刊文化財』566 号，13-25 頁

谷澤 亜里 2015「井尻 B32 次調査出土のガラス玉類について」『井尻 B 遺跡 25』福岡市埋蔵文化財調査報告書』第 1251 集、福岡市教育委員会、41-46 頁

日本住宅公団 1980『瑞穂　福岡市比恵台地遺跡』

（4）鉄器（Fig.30、ＰＬ．８－11,12）

6は、茎の長い鏃状鉄器だが、**漁撈用刺突具（ヤス）**の類だろう。残存長6.4㎝。先端の三角形状刃部長0.8㎝、刃部幅0.75㎝で、茎下部断面は正方形に近いが（幅0.4～0.5㎝）、茎刃部側は平坦気味の長方形断面（幅0.5～0.8㎝）となる。磁性があり、若干のメタル質が残るか。**7**は磁性が強く残る**メタル質**の**鉄素材**。平面台形、断面厚さ0.5～0.7㎝の板状。錆を除く長さ4.0㎝、上辺2.5㎝、下辺3.8㎝。なお鉄器の図化は埋蔵文化財センターの機器で撮影したX線写真を参照した。

その他、報告書作成中に急きょ加えたが、軽石または凝灰岩製の**浮子**ないし**磨石**の可能性がある石製品片がある（**Fig.30－8**）。表面は研磨される。4.56g。

Ⅲ．調査のまとめ

比恵145次調査では、50次調査後に建設されたビル工事に伴う掘削により、調査対象区の約半分の遺構が失われていたが、その影響を免れた範囲では、50次と同様に極めて濃密な遺構が検出された。確実な遺構は不明確ながら**須玖Ⅰ式期（弥生時代中期前半～中頃）の土器片が比較的多く**あり、段丘中央の本格的な集落開発の開始が分かる。その後の**弥生時代中期後半・後期・終末期・古墳前期前半**は遺構と遺物が間断なく認められる。まさに**「奴国」の中心的拠点**として栄えた時期である（3～7頁「周辺の地理的歴史的環境」参照）。その他、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構も若干認められたが、50次で同時期のSD001（弥生後期溝の再掘削の可能性）や大型倉庫群があり、「那津官家」関連だろう。**竪穴住居（建物）**は少なくとも6棟以上あり、他にも貼床痕跡や壁周溝痕跡が複数、住居主柱跡の可能性があるもの（**SB08**）があるから、実数はそれ以上である。**掘立柱建物**は**20棟以上**を推定したが、柱穴はかなり多く、本来はより多くの建物が存在しただろう。建物の大部分は弥生中期から古墳前期前半であり、比較的大型の平地建物（**SB03, SB18, SB09？**）、１×１間の**楼観**建築？（**SB02**）、平地住居の可能性がある建物（**SB04, SB07, SB19？, SB21？**）がある。住居・建物の方位軸は、**弥生終末期以降**は調査区西方に造営された同時期の**道路遺構の方位**に近い。**SC005**からは**ガラス小玉**多数と**北陸系小型管玉**が出土した。小玉は弥生後期前半～中頃の墳墓に多い材質だが、出土遺構は後期後半ないし終末期である。類似事例が井尻B32次等にあり、ガラス小玉の流通は墳墓と集落で異なる可能性がある。SC005屋内土坑**SK1220**から大型の**玉砥石**（多目的砥石）が出土したが、玉石材や剥片は出土せず、工房は近隣にあろう。**SC031**からは石器と鉄器の**漁撈具**が出土したが、海上交易活動に関わる居住者が想定される。その他、**楽浪土器筒坏模倣土器**（Fig.28－5）、**近畿系手焙り形土器**片（Ph.1-1）の出土が注目されるが、50次調査時の145次重複区内または隣接遺構の出土土器に、**弥生後期から古墳初頭の瀬戸内系土器**が多いことが注目される（Fig.35-2,5～7）。今回、**板状鉄素材**（Fig.30－7）が出土し、南側の**57次**（Fig.3）でも**鉄素材**や**辰砂**（水銀朱原料）が出土しており、弧状溝**145次SD001下層＝50次SD055下層・SD066**に囲まれた範囲は、弥生時代後期～終末期の**長距離交易の「市場」的空間**の可能性が考慮される。

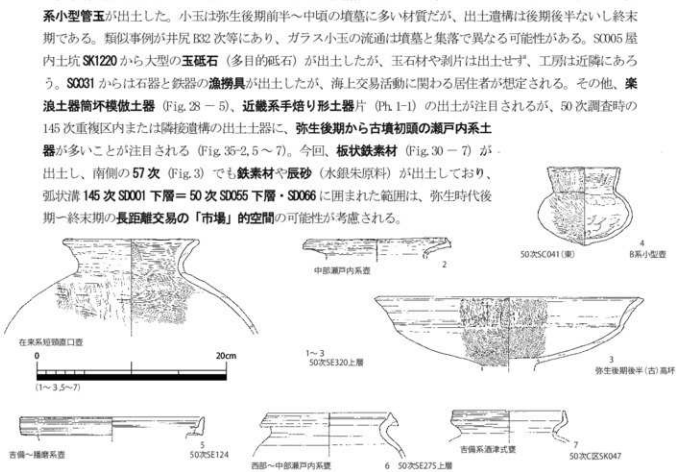
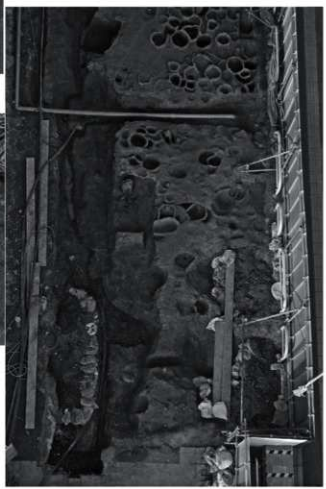


Fig.35　比恵50次出土145次調査区関係土器(1/4, 4のみ1/3)

1．西側調査区全景（南西から）

2．西側調査区東～中央調査区（南西から）

4．西側調査区東辺基礎撹乱底面確認状況（西から）



3．西側調査区西端遺構掘削状況（西から）

1．西側調査区建物基礎撹乱底面確認状況（南西から）　2．中央調査区西半基礎撹乱底面確認状況（北東から）

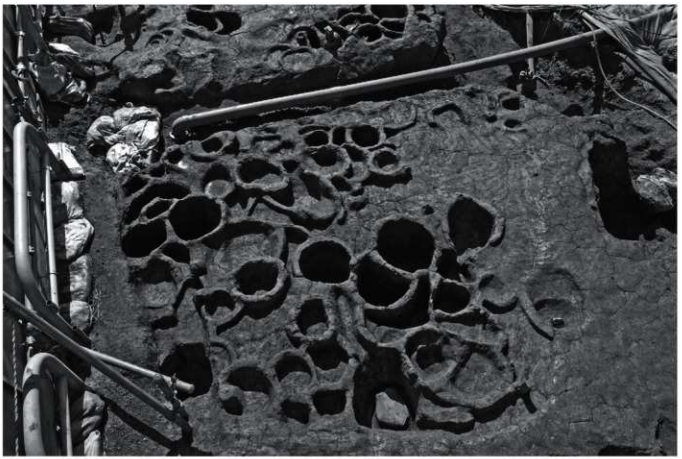
3．中央調査区-7～+8m 遺構確認状況（北東から）　4．北東側調査区撹乱底面確認状況（北東から）

1．東側調査区西～中央調査区（北東から）

2．東側調査区建物基礎撹乱底面状況（南西から）

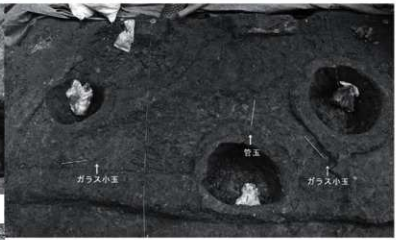
4．西側調査区 SC020 完掘状況（東から）

3．西側 SC020 完掘状況（西壁掘削状況）（南から）



1．西側調査区 SC005 および上部ピット群調査状況（東から）

2．SC005 東半・上部ピット群掘削状況（北から）



3．SC005 南東部ガラス小玉・碧玉管玉出土状況（北から）

4．SC005 ガラス小玉出土状況近景（西から）

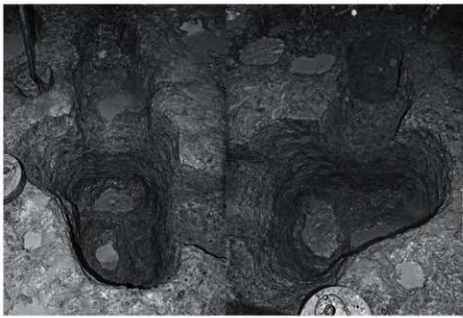
5．SC005 中央土坑・東側屋内土坑掘削状況（東から）

1．SC005 最終掘削状況（西から）

2．SC005 東辺完掘状況（北西から）

3．西側 SX008(SP1004 掘方）ほか柱穴群掘削状況（南から）

4．SX008（大型柱穴）完掘状況（西から）



5．西側 SP1038-1073-1072-1042 柱穴列完掘状況（西から）

6．SP1073-1038 完掘状況（北から）

7．SC005 南下部 SX041（大型柱穴）完掘状況（西から）

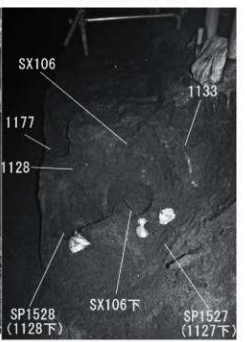
8．東側 SP1035 土層断面（南東から）

1．西側 SC005 および上部ピット群掘削状況（南から）

2．西側 SC020 および上部遺構群掘削状況（東から）

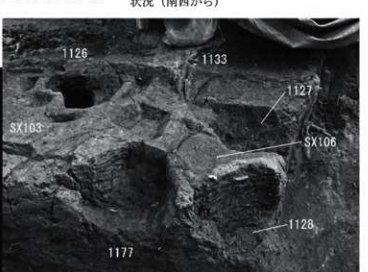
3．東側 SX003（SC012 ほか）掘削状況（東から）

4．東側 SP1126, SP1127, SP1128, SP1177, SX103, SX106 ほか検出状況（北東から）

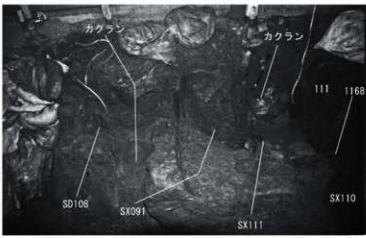


6．東側 SX106, SP1128-1528, SP1527 完掘状況（南西から）

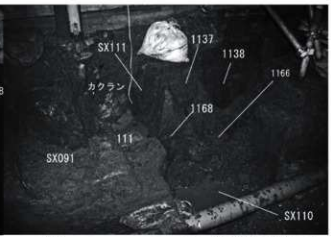
7．東側 SX101-103 ほか最終状況（北から）



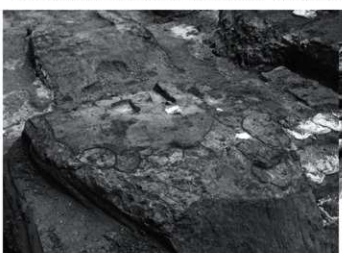
5．東側 SP1126, 1127, 1128. 1177, SX103, SX106 ほか検出状況（北西から）



1．東側 SD081, SX091, SX111 ほか掘削状況（北東から）

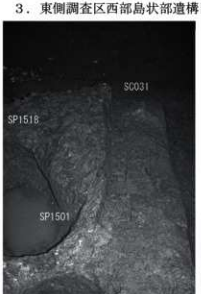


2．東側 SX091, SX111, SX110 ほか掘削状況（北から）



3．東側調査区西部島状部遺構当初検出状況（西から）

4．東側西部島状部遺構検出断面状況（北から）



7．SC031 完掘状況（南東から）

6．東側西部 SC031 鉄器出土状況（北東から）

5．東側西部島状部遺構検出状況（北西から）

10．中央 SP1413・1414 検出状況（北から）

8．中央調査区基礎撹乱断面（表土掘削時）（北東から）

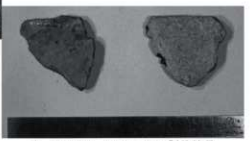
9．中央調査区南辺（SD001 前後）遺構検出状況（北から）

1．SP1413-1414,SP1411-1418-1490 検出状況（北から）

2．中央調査区 X=18～22m 南辺ピット群掘削状況（東から）

4．中央 SD038-039,SP1439（SD001 西側）完掘状況（南西から）

3．中央調査区 SD001 西,SP1400-1401 検出・掘削状況（北西から）



5．Fig.30-1,Fig.31-10 石製穂摘具（石包丁）写真

7．Fig.30-3 凹石・磨石写真（上面/下面）

6．Fig.30-2 磨製石剣茎片写真

8．Fig.30-4 石錘（礫石）写真（上面/下面）

9．Fig.30-5 石錘写真（上面/下面）

11. Fig.30-6 鉄製刺突具（漁具？）写真 ・ X線写真

10. Fig.31-9 石錘写真（正面/側面）

12. Fig.30-7 板状鉄素材写真・X線写真

報告書抄録

ふりがな	ひえ84－ひえいせきぐんだい145じちょうさのほうこく－
書名	比恵84
副書名	－比恵遺跡群第145次調査の報告－
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1352
編著者名	久住猛雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目8-1　電話番号　092-711-4667
発行年月日	西暦2018年3月26日

遺跡名ふりがな	ひえいせきぐんだい145じちょうさ
遺跡名	比恵遺跡群第145次調査
所在地ふりがな	ふくおかしはかたくはかたえきみなみ４ちょうめ４９－１，４９－２
遺跡所在地	福岡市博多区博多駅南４丁目４９－１，４９－２
市町村コード	40132
遺跡番号	0127
北緯	33度34分40秒（世界測地系）
東経	130度25分50秒（世界測地系）
調査期間	20160801～20160930
調査面積（㎡）	423㎡
調査原因	店舗ビル増築工事

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、室町時代、戦国時代、江戸時代	竪穴住居（弥生時代～古墳時代前期、古墳時代後期～飛鳥時代前期）、溝状遺構（弥生時代？、古墳時代後期～飛鳥時代、中世、近世）、井戸（弥生時代）、掘立柱建物（弥生時代～古墳時代前期、古墳時代後期～飛鳥時代）、土坑、柱穴多数	弥生土器、楽浪土器模倣土器、古式土師器、古墳時代後期・飛鳥・奈良時代の土師器・須恵器、中世（平安時代後期以降）の土師器・輸入陶磁器・国産陶器、近世の国産陶磁器、旧石器時代・縄文時代・弥生時代の石器、弥生時代の鉄器、ガラス小玉（弥生時代）、碧玉製管玉（弥生時代） 出土量はコンテナケース計17箱	50次調査後のビル建設で、調査対象区のうち既存ビル側の多くが広く掘削されてしまったが、それを免れた範囲では非常に濃密な遺構の検出を見た。弥生時代中期前半から古墳時代前期前半の遺構が大半である。細長い調査区で、かつ撹乱部分が多いものの、竪穴住居6棟以上、掘立柱建物20棟以上を検出した。SC005出土のガラス小玉の組成は、当時のガラス小玉の流通のあり方を再考する資料となり、同じ住居の旭内土坑出土大型玉砥石は、近隣に玉作工房の存在を予想させる。SC031からは鉄器・石器の転撥具が出土したことも興味深い。本調査区に重複する比恵50次Ｃ区と合わせて外来系土器（瀬戸内系土器複数、近畿系土器、楽浪土器簡易模倣土器ほか）が多く、鉄素材、列島外産のガラス小玉や東日本産碧玉製小型管玉などの出土から、長距離交易遺物が集散された場所の可能性がある。145次SD001は50次SD055と同じだが、下層遺物は弥生時代後期を下限とし、50次ではSD055北側で切られているSD066に本来は接続するとみれば、この弧状溝は古墳時代後期に再掘削されたもので、弥生時代後期退館前の可能性がある。さらにこの溝は、長距離交易に関わる取引が行われた場所を囲む区画であった可能性がある。

比恵　84

―比恵遺跡群第145次調査の報告―
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1352集

2018年3月26日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８－１

印刷　高松印刷有限会社
福岡市東区松島１丁目４－１０